

# 北大時報

May 2009

No.662

平成21年

5

**春の叙勲に本学から8氏**

**大韓民国東義大学校と  
大学間交流協定を締結**

## お知らせ

- 平成21年度北海道大学公開講座  
「現代社会と倫理—安全・安心な暮らしを実現  
するために—」
- 平成21年度 人間ドックの実施について
- 北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設



花木園の黒百合（関連記事65頁に掲載）

# 目次

## 全学ニュース

- 春の叙勲に本学から8氏……………1
- 大韓民国東義大学校と大学間交流協定を締結……………19
- 「創成研究機構」を設置……………20
- 「人材育成本部」を設置……………21
- 創成研究機構に寄附研究部門を設置……………22
- インキュベーション施設「北大ビジネス・スプリング」のオープニングセレモニーを開催……………23
- 北大フロンティア基金……………24
- 札幌キャンパスで「第6回キャンパス・クリーンデー」を実施……………26
- 放射線障害防止のための教育訓練及びエックス線障害防止のための教育訓練を実施……………27
- 平成21年度「全学教育科目に係るTA研修会」を開催……………28
- 「日本語研修コース」入学式を挙……………28
- 「新入生対象オリエンテーション」を開催……………29
- 北海道大学総長奨励金ならびに北海道大学私費外国人留学生特待制度奨学金給付証書授与式を挙……………30

## 部局ニュース

- 触媒化学研究センターがアイオワ州立大学理工技術研究所と友好学術交流協定を締結……………31
- 数学連携研究センター看板の設置……………32
- 北海道大学学術成果コレクション HUSCAP 講演会を開催……………33
- 統合環境科学のための野外トレーニングコースに関する国際ワークショップ開催……………34
- 経済学部で「こころの健康」をテーマに講演会を開催……………35
- 水産科学院・水産学部で「教員とTAの合同研修会」を開催……………36
- 函館キャンパスで“チシマザクラ”植樹式及び記念講演会を実施……………37
- 半澤洵関係資料を大学文書館で新たに受贈……………38
- 池田芳郎旧蔵写真を大学文書館で受贈……………39
- 大学院生による博物館展示リニューアルの取り組み……………40

- 総合博物館土曜市民セミナー「北海道開拓と北前船」が開催される……………41
- 1929年の駒ヶ岳大噴火の記録写真を総合博物館で受贈……………42
- 無脊椎動物中枢神経系標本を総合博物館で受贈……………43
- 北海道大学病院で事務職員による「ピアノ演奏会」を開催……………44
- 工学部に新食堂（リフレッシュホール）オープン……………45
- 植物園の夏期開園と「みどりの日」の無料開園……………46

## お知らせ

- 平成21年度北海道大学公開講座「現代社会と倫理—安全・安心な暮らしを実現するために—」……………47
- 平成21年度 人間ドックの実施について……………49
- 北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設……………50

## 研修

- 平成21年度北海道地区国立大学法人等初任職員研修（一般職）……………53

## 表敬訪問

- ……………54

## 同窓会との交流

- ……………54

## 諸会議の開催状況

- ……………55

## 学内規程

- ……………56

## 人事

- 新任部局長等紹介……………60
- 新任教授紹介……………61

## 訃報

- 教授 津田 芳郎 氏……………62
- 名誉教授 高木 徹 氏……………63

## 資料

- 役職員数（平成21年5月1日現在）……………64

表紙：花木園の黒百合

裏表紙：北の息吹<sup>㊦</sup>エゾノリュウキンカ (*Caltha fistulosa*)

## 春の叙勲に本学から8氏

このたび、本学関係者の次の8氏が平成21年度春の叙勲を受けました。

勲章	経歴	氏名
瑞宝大綬章	名誉教授(元 総長)	丹保憲仁
瑞宝中綬章	名誉教授(元 電子科学研究所長)	朝倉利光
瑞宝中綬章	名誉教授(元 経済学部長)	長岡新吉
瑞宝中綬章	名誉教授(元 環境科学研究科長)	伊藤浩司
瑞宝中綬章	名誉教授(元 言語文化部長)	新妻篤
瑞宝双光章	元 看護部長	平山妙子
瑞宝双光章	元 施設部長	遠藤健二
瑞宝单光章	元 工学部経理課ボイラー長	洽地守

各氏の長年にわたる教育・研究等への功績と我が国の学術振興の発展に寄与された功績に対し、授与されたものです。

各氏の受章にあたっての感想、功績等を紹介します。

(総務部広報課)

### ○丹保憲仁氏



昭和14年小学校1年生となり、札幌に定住するようになって70年になる。工学部白亜館前の中央道路にあった機関車に登ったり降りたり、友人のお父さんの教授室の医局のアルコール浸け標本をこわごわ眺めたり、理学部の鉱石標本やデスモスチルスの化石を見たり、山スキーを藻岩山で初めて習ったり、雪の結晶の研究を父兄である中谷宇吉郎先生が小学校の音楽室に幻灯機を持ち込んで講演してくださったり、ポプラ並木のほとりのサクシュコトニ川でトンギョを掬ったり、小学校のころから北大の庭で遊び育ててもらった。

昭和26年自然の流れのように北大に入れてもらい、半世紀ちょうど50年をすごし、昭和32年に日本最初の環境工学の学科(衛生工学科)の創設にかかわり、21世紀の変わり目まで働いて総長を退き北大を去った。それまでの間、太平洋

戦争(大東亜戦争)、敗戦、朝鮮戦争、国土復興、経済成長、大学紛争、ミーイズム……とめまぐるしく日本と日本人の変転を経験した。

根が不器用なのに、先の見える多くの畏友に触発されて、「したいこと」より「しなければならぬこと」にいつも引きずられ、人参を目の前にぶら下げられたお馬のように、現役の北大50年と放送大学6年とさらに少しを、休むことなくただひたすら歩き続けることになった。北大キャンパス育ちの唯一の総長として、自然の流れの中で、北大に身も心も深くかかわってきたように思う。いただいた勲章の謂れは、「長い間にわたり仕事をひたすらしたこと」に対することにあるようで、顕著な業績とは書いてないらしいから、北大人を代表して有り難くいただくことにした。休まず働いたことを認めていただけたことを有り難く思っている。不器用で、浅学非才の我流の塊であることから、多くの先輩、仲間、後輩にご迷惑と配慮不足のご不快をかけ続けたことと思う。心底から申し訳なく思っている。専門の水の研究も、独創性といえば聞こえが良いが、世の常識と違う体系を上下水道、水環境管理に見続けて50年、まだ世の中

がついてこないのか、こっちが勘違いしているのか定かでない迷妄の中で、まだ現役で苦闘している。

20世紀最後の北大総長として、国立大学の法人化前夜の大学を預かって悪戦苦闘した成果が、どのように国立大学法人の将来に役に立っていくのか、見守って行きたいと思う。生まれ故郷北海道の行く末、日本の未来を考えると、残り少ない人生の中でまだ「したいこと」より、「しなければならないこと」があるぞと耳元でささやく悪魔がいる。放送大学長として東京で暮らした6年間、土木学会長、国際水協会長、大学設置法人審議会長、国立大学教育研究評価委員長、国土審議会委員・北海道分科会長などとして、短い期間にそれまでの経験では捌ききれない濃密な勉強を強いられた。学習の成果を、『日本の教育の未来』と『世界と日本の水問題解決』の糸口を探るために役立てたいと思っている。自身に残っている時間はそんなにないが、ご指導いただいた方々、一緒に汗を流した仲間とともに21世紀の大転換期に少しでも経験を役立てられたらと、未老の後期高齢者はおももも動いている。皆さん、長い間本当に有難う御座いました。未だ暫時よろしくご支援ください。

長い間家を預け放しにした老妻と、一二度でよいから、仕事でない国内外の旅行が出来たらと希求している。お互いに元気でいたいと願っている。北大のキャンパスに栗鼠を走らせたいと思ったがだめであった。最大の挫折である。愚考である。

### 略 歴 等

生年月日 昭和8年3月10日  
 昭和32年4月 北海道大学工学部講師  
 昭和33年4月 北海道大学工学部助教授  
 昭和44年4月 北海道大学工学部教授  
 平成3年4月 } 北海道大学学生部長  
 平成5年3月 }  
 平成5年4月 } 北海道大学工学部長  
 平成7年4月 }  
 平成7年5月 } 北海道大学総長  
 平成13年4月 }  
 平成13年5月 北海道大学名誉教授  
 平成9年7月 日本学術会議会員（～平成15年

6月)

平成13年5月 } 放送大学長  
 平成19年4月 }

平成19年5月 放送大学名誉教授

### 功 績 等

#### 1. 学術分野における功績について

- 1) 水環境工学・都市水工学の揺籃期から発展・成熟の過程に至るまで、この分野の教育・研究の先達として、また世界・アジア・日本のリーダーとして、我が国の環境工学の発展をリードし、日本の環境科学・行政・産業界に多くの指導的人材を送り出した。
- 2) 都市における上下水道の先駆的研究者として、環境容量・都市水代謝システムという新概念を提案して都市の持続的な発展の方向性を1970年代の早い時期から示し、水環境の制御のための工学的手段としての各種水処理プロセスを、水質マトリックスに基づいて総合的機能評価・設計する画期的研究を行った。
- 3) 1970年代に、丹保・渡辺のGCT値理論といわれる、20世紀から現在に至るまで世界の主力浄水処理法である急速濾過システムの基幹部分の理論設計法を世界で最初に確立した。
- 4) 1960年代の粘土系コロイド、フミン質コロイドの凝集機構の解明から始まる一連の研究により、フロック集塊のフラクタルな性質を示すフロック密度関数とフロックの強度関数を世界で初めて提案し、現在もこの理論上で、国内外の多くの研究が行われている。
- 5) 平成13年～平成14年、第89代土木学会長として、「人口減少下の日本社会の基盤整備」に関わる多くの提言を行い、近代の次に来る時代に向かうための提言を続けている。
- 6) 1947年に設立された国際水道協会(International Water Association: IWSA)と1965年に発足し国際水質協会(International Water Quality Association: IAWQ)となった世界最古のふたつの水学



会の発展的統合をはかり、世界72ヶ国・地域の機関と4,500人の個人会員を持つ国際水研究組織 International Water Association (IWA) の設立に尽力した。平成13年からは第2代会長を務め、2001年のベルリン会議、2003年のメルボルン会議を成功に導き、世界最大の水学会創設と発展の責任者として尽力した。

- 7) 昭和50年から OTCA (引き続き JICA の発足) の下で、日本最初の海外技術教育使節団長としてインドネシア水道技術教育へ参加、昭和54年よりアジア工科大学 (AIT) の環境工学科支援、昭和58年より中国西安建築科技大学、同済大学で文革直後からの中国若手教員・技術者の指導、昭和50年代からの国内における JICA 水道技術コースの設立等、アジアの水技術教育の最前線で長期にわたり活動した。

## 2. 学長としての功績について

### (北海道大学総長として)

- 1) 構内環境整備：北海道大学40年来の懸案であった北18条道路のアンダーパス化 (エルムトンネル) を実現させる、南・北キャンパスの一体化に主導的な役割を果たし、一体化された後の北キャンパスにおける「研究ビレッジ構想」「エコキャンパスの創成」「北海道大学キャンパス・マスタープラン96」の策定とそれに基づく構内整備に大きく貢献した。構内のサクシュ琴似川の復元、大野池の整備、平成ポプラ並木など構内の自然の回復と環境整備に尽力した。
- 2) 産学連携の推進：地域社会や産業界の要請等に積極的に対応し、先端科学技術共同研究センター及び全国で初めて国立大学構内に第3セクターである「北海道産学官協働センター」を北キャンパスに設置し、北海道内各大学等からの研究成果を実際の経済・産業活動に有効利用するためのパイプラインとなる「北海道TLO」の設立運営に尽力した。
- 3) 大学院重点化の推進：平成12年度に完成した北海道大学の大学院重点化に大きく貢献した。また、大学院重点化後における研

究科の垣根を越えた共通授業の実施並びに学部教育におけるコアカリキュラム導入による全学共通の教養教育、シラバスの電子化の計画と実施を主導した。

- 4) 学内施設の充実：北大のフィールドサイエンスの伝統を発展させ、全国に「フィールド科学研究センター」を創設する文部科学省の検討」会の責任者を務め、その第一号として、北海道大学の北方生物圏フィールド科学センターを発足させた。北大が長らく懸案としてきた学内共同教育研究施設としての「総合博物館」を理学部本館を転用して創設した。さらに、全国共同利用施設として「低温科学研究所」の改組、学内共同利用施設として「情報メディア教育研究総合センター」、免疫科学研究所と医学部附属癌研究施設との統合により「遺伝子病制御研究所」、独立研究科として「国際広報メディア研究科」の設置等に尽力した。大学院地球環境科学研究科、薬学部、低温科学研究所、高等教育機能開発総合センター、獣医学部、工学部等の大型改修・校舎工事及び文系学部の総合研究棟の施設整備に尽力した。
- 5) 創基120周年記念～125周年記念事業を計画、新しい世紀への展開を図る5カ年計画を困難な経済情勢のもとで新理念のもと大学をあげての努力で実行し成功に導いた。

### (放送大学学長として)

- 1) 平成15年10月、放送大学学園が特殊法人から特別な学校法人へ移行するにあたり、学長たる理事として理事長を十分に補佐し、移行が円滑に実施されるよう尽力した。
- 2) 平成16年度に「専攻とカリキュラムのあり方検討ワーキンググループ」を立ち上げ、教育の責任体制の確立を図る領域科目群を設定し、新しい教育理念の下にカリキュラムの体系化を行い、学部・大学院の課程を刷新し、社会や学習者のニーズに応えるとともに、学問領域を明確にした。
- 3) 国立大学等との間に単位互換共同研究プロジェクトを計画、平成17年度より実施し、特別聴講学生数の大幅な増加をもたらした。

た。また、平成18年7月に「連携・資格プロジェクト」を設置し、其の第一弾として、看護師学校・養成所との連携協力により、准看護師の看護師への昇格教育を画期的に推進した。これらの結果、学長在任時に80を超える大学等との単位互換協定を新たに締結した。

- 4) ラジオ授業科目についてのインターネット配信実験を行い、平成19年度から全てのラジオ授業科目をインターネット配信するなど、メディア戦略を率先して推進した。
- 5) AAOU（アジア公開大学連合）の常任理事として、ICDE（国際遠隔評議会）の日本代表として、多くの国際会議に出席し、日本の通信教育の国際化、放送大学の国際交流に多大なる貢献を果たした。放送大学の英文名を「The Open University of Japan」とし、国際通用性を高めた。

### 3. 行政協力等における功績について

- 1) 国立大学協会第7常置委員会委員及び委員長として、現在の教授、准教授、助教からなる教員新システムを国大協総会に提案・了承され、各関係機関に働きかけ、その創設に尽力した。
- 2) 大学設置・学校法人審議会会長として、我が国の大学設置行政の大転換期に6年間にわたって大学・学部等の設置に指導的な役割を果たした。とくに法科大学院、専門職大学院、通信制大学院等の新大学院制度の発足にあたり、最初の制度運用と許認可の責任者を務め、新システムを小委員長として直接審議し新展開の中心を務めた。
- 3) 大学基準協会会長、大学評価・学位授与機構 国立大学法人教育研究評価委員会委員長、大学機関別認証評価準備委員会委員等として、わが国の大学評価の創生期から実施全般の責任者として、国、公、私立大学評価の中枢を担って新しい大学の発展に尽くした。
- 4) 「国際的な大学の質保証に関する調査研究準備委員会」委員長（平成15年度）、G8エビアン・サミットにおいて「持続可能な開発のための科学技術」についての行動計

画が合意されたことに伴い、地球観測分野の専門家で構成された「地球観測国際戦略策定検討会」座長（平成15年度）、「大学への早期入学（飛び入学）及び高等学校・大学の接続に関する協議会」座長（平成17年度）、21世紀COEプログラム委員、特色ある大学教育支援プログラム実施委員会副委員長、「専修学校の振興に関する検討会議」座長など文部科学省の教育行政に大きく貢献した。

- 5) 内閣府の「地球温暖化研究」、「自然共生型流域圏・都市再生技術研究」等の重点的研究開発を推進する「総合科学技術会議」専門委員（平成13年度）として、「自然と共生した都市・流域圏研究」座長を務め、環境イニシアティブの展開を牽引した。
- 6) 国土交通省の「国土審議会」委員および、「社会資本技術開発会議」委員（平成13年度）を務め、国土審議会北海道分科会長として北海道開発の基本方針を策定する責任者を務めている。さらに、首都圏整備部会長として、首都圏のさまざまな発展に尽力した。
- 7) 北海道総合開発委員会委員長、北海道功労賞受賞者推薦委員会委員長、北海道科学技術審議会会長、札幌市公害対策審議会会長、札幌市環境審議会会長等を務め、地方の教育行政・地域社会及び学術研究等の発展に多大な寄与をした。

（総務部職員課）

### ○ 朝倉利光氏



この度の叙勲で受章することになり、感激するとともに、まことに光栄に存じております。これはひとえに北海道大学における教育と研究に対するもので、改めて私の研究室におられた教職員と学生の諸氏に心から感謝を申し上げます。また、

すばらしい環境を与えてくださった北大、そしてそこでご指導、ご支援、ご協力を頂いた多くの方々に深く御礼を申し上げる次第です。さらに、この度の叙勲において、推薦などの手続きの労をお取り下さった大学の担当者の方々に、厚く御礼を申し上げます。

昭和30年代の後半、東京で研究生生活を送っていましたが、研究が行きづまり、海外での研究を考え、日本を離れる前に初めて北海道を旅行しました。その途中で寄った北大で、新しく誕生する工学部応用物理学科への招聘を受け、昭和41年に助教授として着任しました。新学科は、斬新さに富んだ環境と雰囲気に入れられ、教官も学生も澁刺としていました。しかし、数年するうちに、大学紛争などで教育研究は停滞気味になり、それからの脱出に苦しんでいました。この苦悩からの脱皮を模索しているときに、応用電気研究所からの招聘があり、それを受けることにしました。工学部での5年間は、新学科の建設や大学紛争を通して、数多くの教職員と親密な交流をもつことができ、その後の大学生活において工学部は故郷のような精神的支柱となりました。

昭和46年、応用電気研究所（現在の電子科学研究所）に教授として着任しました。それから停年まで26年間、そこで若い優秀な教職員と大学院生と一緒に独自の幅広くかつ学際的な研究を展開し、多くの研究成果を積み上げることができ、研究者人生を満喫することができました。さらに、多くの外国人研究者や留学生を迎え、自由な国際的雰囲気の中で種々の交流と研究活動を展開することができました。このような研究生生活を送ることができたのは、研究所がすばらしい研究環境を保っていたことによります。精神的には十分にオリジナリティを追求できる研究環境にあったこと、また研究費などは必ずしも充分ではありませんでしたがいろいろな支援体制があったことなどによります。また、教授会は年齢に関係なくいろいろな課題について自由な議論を展開し、研究を最重要課題としてそれを強力に推進するための改革を実行してきました。この過程で、応用電気研究所は平成4年に改組転換し電子科学研究所となり、研究分野を学際的研究に重点を置きながら、横断的・

複合的方向への拡大発展をめざしてきました。このようなすばらしい環境をもった研究所で研究する幸運に恵まれたことを、特にその当時の教職員の方々から受けた恩恵は計り知れないものがあり、改めて心から感謝を申し上げる次第です。

北大を退職後、平成9年に北海学園大学工学部及び大学院工学研究科の教授に就任し、さらに平成17年には同大学学長に就任し、現在に至っております。学部及び大学院においては専ら教育に従事しましたが、学長になってからは教育研究行政・運営に従事しており、同大学の発展に全力を注いでいます。

### 略 歴 等

生年月日	昭和9年1月20日
昭和36年3月	東京大学生産技術研究所助手
昭和41年4月	北海道大学工学部助教授
昭和46年7月	北海道大学応用電気研究所教授
平成4年4月	北海道大学電子科学研究所教授
平成6年4月	北海道大学電子科学研究所長
平成9年3月	
平成9年3月	北海道大学停年退職
平成9年4月	北海道大学名誉教授
平成9年4月	北海学園大学教授
平成16年3月	
平成11年4月	北海学園大学大学院工学研究科長
平成14年3月	
平成17年4月	北海学園大学長
平成17年4月	学校法人北海学園理事

### 功 績 等

同人は、昭和9年1月20日福島県に生まれ、同32年3月国際基督教大学教養学部自然科学科を卒業し、同35年5月ボストン大学物理学教室大学院を修了しました。昭和36年3月東京大学助手に採用され生産技術研究所に勤務し、同40年3月には東京大学より工学博士の学位を授与されました。昭和41年4月北海道大学工学部助教授に昇任し、同46年7月北海道大学応用電気研究所教授に昇任しました。平成4年4月には同研究所の改組により北海道大学電子科学研究所に配置換となり、同6年4月より電子科学研究所長として改組後の研究所の充実・発展に尽

力され、同9年3月31日停年により退職し、同年4月北海道大学名誉教授の称号が授与されました。平成9年4月北海学園大学工学部及び大学院工学研究科教授に就任し、同11年4月から3年間大学院工学研究科長を務め、同16年3月同大学を停年により退職した後、同17年4月北海学園大学長及び学校法人北海学園理事、評議員に就任し、現在に至っています。

同人は電子情報光学、特に光物理学・光工学の基礎研究とその広範囲な応用研究を行い、レーザー光の物理的特性やレーザー光の伝搬・回折・散乱などの物理現象を多角的な視点から解明するとともに、それらの計測・情報処理技術・医工学への応用研究を展開し、種々の新しいレーザー応用計測技術や情報処理システムを開発するなど、新時代の先端的な光化学技術の発展に大きく貢献しました。

その一例として挙げられるのが、レーザー光の散乱によって生じるランダムな干渉現象であるスペckル現象の研究です。同人は、レーザー光の物理的特性やレーザー光の伝搬・回折・散乱などの物理現象を多角的に解明し、種々の新しいレーザー応用計測技術や情報処理システムを開発し、光物理学・光工学の基礎研究とその広範囲な応用研究に貢献しました。特に、レーザー散乱によって生じるスペckル現象の統計的性質を詳細に解明し、その応用に関する多くの新しい技術を開発し、統計光学の分野を確立しました。

この他、レーザー光とフラクタル物体との相互作用に関する集中的な研究による新しい学問分野「フラクタル光学」を確立したこと、レーザードップラー顕微鏡、レーザースペckル表面粗さ計、録音蠟管音声再生機など多くのレーザー応用計測・光情報処理法や機器の開発したこと、B. ピウスツキおよび北里蘭の録音蠟管の発見およびレーザー光による音声再生を通してアイヌ文化などの言語学・民族学・文化人類学に貢献したことなど多くの業績を残されました。

さらに同人は、国際交流に関する活動を多方面から行ってきており、特にインドネシア大学大学院の設立及びその後の教育・研究の指導に尽力され、日本と東南アジア諸国の学術交流に

おける先鞭的な役割を果たしています。また、平成2年には国際光学委員会副会長、同8年には同委員会会長、同2年にはアジア太平洋光学連合の副会長等を歴任し、国際的立場で世界の先頭に立って、最新の光科学分野の発展に貢献しました。

学内にあっては、平成6年4月より評議員として本学運営の枢機に参画しているほか、安全点検専門委員会、キャンパスマスタープラン委員会をはじめ種々の学内委員会委員として北海道大学の発展に尽力されました。

以上のように、同人は40年以上にわたり研究教育・運営に尽くすと同時に、わが国及び世界の学術研究の発展に貢献されました。

(電子科学研究所)

### なが おか しん きち ○長岡新吉氏



この度は、叙勲の栄を賜り、たいへん光栄に思っております。

1963年からの北海道大学在職30年を振り返りますと、講義、ゼミ、大学紛争、評議員時代、経済学部長時代などを通じ、様々なことが

あったのだらうと思います。しかし、その記憶も遠いものになり始めている現在、私が強く思うことは日本経済史を研究する上で、北大は私に貴重な資料を提供してくれるかけがえのない職場環境だったということです。

私が山口和雄先生の後任として北大経済学部に来たのは1963年4月ですが、その時にまず驚いたことは図書館にわが国の経済史の資料が膨大にあることでした。それは、前任の弘前大学とは比べものにならないほどの資料の山でした。この資料は、おそらく北大が札幌農学校時代から農業経済研究に関わる文献やデータを蓄積してきた結果だと思えます。図書館には、「東京経済雑誌」「東洋経済新報」などの明治・大正期にまで遡る経済史の資料が整理されており、私はそれらを借り出しては研究室で読みま



した。この経済史の資料を基に、学位論文としてまとめた「明治恐慌史序説」を著すことができたのも、北大に職を得たお陰だと考えております。

私に北大の赴任を勧めて下さったのは、東京大学の大学院生時代に薫陶をうけた土屋喬雄先生と当時北大で日本経済史の非常勤講師をされていた東京教育大学の楫西光速先生でした。土屋先生は、私の指導教官である安藤良雄先生の恩師でもあり、安藤ゼミで何度か講義をしていただきました。楫西先生は、同じ土屋先生門下の先輩にあたります。私は、院生時代から両先生と日本通運(株)の社史編纂に携わっており、弘前大学に赴任した後もこの仕事を続けておりました。ある日、楫西先生から突然電話があり、「長岡君、北大に行かないか?」と聞かれました。私は、私学でも良いから東京の大学を、と当時は考えておりましたが、土屋先生や楫西先生の熱心な勧めと旧帝国大学である北大の魅力から、赴任する決心をしました。

こうして北大で長年にわたる研究と教育の場を持つことができたのです。明治・大正期から昭和期につながる複雑な経緯を経済史の角度から追究してきた私には、本当にかげがえのない時間と場所を与えられたという気持ちで一杯です。そして今、私は「昭和」という時代に深い関心を寄せており、「昭和史」を新たな角度から快り出す方法を考慮中です。

瑞宝中綬章という身にあまる栄誉を拝受できましたことは、偏にこのような研究環境と同僚の学兄や家族の支えによるものと考えております。ここに深く感謝し、御礼を申し上げる次第です。

### 略 歴 等

生年月日 昭和5年4月19日  
 昭和33年4月 弘前大学文理学部講師  
 昭和37年4月 } 弘前大学文理学部助教授  
 昭和38年3月 }  
 昭和38年4月 北海道大学経済学部助教授  
 昭和45年4月 北海道大学経済学部教授  
 昭和61年1月 } 北海道大学大学院経済学研究科  
 昭和62年12月 } 長・経済学部長  
 平成6年3月 北海道大学停年退職

平成6年4月 北海道大学名誉教授  
 平成6年4月 } 北海学園大学教授  
 平成13年3月 }

### 功 績 等

長岡新吉氏は昭和5年4月19日岩手県盛岡に生まれ、昭和28年3月東京大学経済学部卒業、昭和30年3月同大学大学院社会科学研究科修士課程(理論経済学・経済史学専攻)修了、昭和33年3月同大学院同研究科(同専攻)博士課程単位修得退学、同年4月弘前大学文理学部講師、昭和37年4月同助教授を経て、昭和38年4月北海道大学経済学部助教授、昭和45年4月同教授、昭和52年8月同大学評議員(2期4年間)、昭和61年1月同大学経済学部長(同大学大学院経済学研究科長・同大学評議員併任、2年間)就任、平成6年3月北海道大学停年退職まで経済学・経済史の教育・研究に努め、北海道大学名誉教授となった平成6年4月北海学園大学経済学部教授、平成13年3月同大学停年退職まで日本経済史の教育・研究に努められた。停年退職後は釧路公立大学経済学部で日本経済史の集中講義担当の講師、北海学園大学大学院経済学研究科で経済学演習の講師を勤めるなど引き続き高等教育に従事、また経済史関係学会からの依頼に応じて学術雑誌に書評を執筆するなど、講壇内外で後進を指導、今日に至っている。

同人は、近代地租改正事業の研究から学究活動を開始して学界に登壇したあと、産業資本確立過程の史的分析へと向かい、その理論的・実証的研究は有力な学説として学界に受け入れられた。それは『明治恐慌史序説』(東京大学出版会、1971年)として公刊され、東京大学より経済学博士の学位を授与され、日本産業革命研究史に確固たる地歩をかためるものとなった。これは日本資本主義発達史に関する同氏の研究の一環であったが、その後の研究蓄積に基づき『産業革命』(教育社、1979年)という明晰な総括をなした新書を世に問い、日本産業革命論を簡潔に叙述して自説を展開しながら、新書形式による出版で啓蒙の才をも発揮した。さらに、日本資本主義論争のいわば主役であった山田盛太郎の名著『日本資本主義分析』(岩波文庫)に対する該書成立過程の分析的考察ならびに異

本ある該書の論理構成にひそむ矛盾の剔抉をはたすことにより、この古典『分析』への根底的批判を打ちだし、1930年代中葉からの久しき『分析』論争史に一矢を放つこともされた。この優れた批判論文を跳躍台にして、往年の学問の青春時代より醸成された問題意識と、長年ゆるりとたくわえられた社会科学のみならず人文分野にも及ぶ学殖、これらを縦横に駆使して可能となった『日本資本主義論争の群像』（ミネルヴァ書房、1984年）で、論争当事者だけでも少なくないの関係者を広範囲にわたって取り上げ、社会科学・人文学の各分野にわたる学究たち、社会運動家らの思想と行動を執拗に追跡しては小説にまで拡張した豊富な文献で裏付けを取りつつ、昭和戦前期の日本知識人の苦闘の足跡を復元し、その思想に肉薄していった成果は同氏をして一介の経済史研究者の枠を大きく越えるものと学界ならびに読書界で評価された。本書で経済思想の分野へも歛を入れられた同氏はその後、石橋湛山を取りあげるなどしながら、リベラリズムを中心とした日本社会経済思想史の研究を進めておられる。

経済学・経済史の教育においては主に北海道大学経済学部で日本経済史の講義、一般経済史の講義、経済学演習を担当しつつ学部学生を薫陶して良き社会人への基礎たらしめ、また北海道大学大学院経済学研究科で日本経営史をも担当しながら、幾人もの大学院生を陶冶して研究者に育成した。このような教育活動と平行して、上記のような厳密な考証に支えられた問題提起的な論文・著作を発表して、研究にも邁進した。その間、経済史総論の大学教科書として定評ある『一般経済史』（ミネルヴァ書房、初版、1983年。第35刷、2005年）の編著者となった。そして、北大経済学部で経済史あり、との世評を高めることになったのである。学会役員としては昭和48年1月から平成6年12月まで社会経済史学会の理事を務められ、北海道大学を会場とする同学会の学術大会も成功裡に導いたのであった。

北海道大学経済学部長としては学部の念願でもあった懸案の大講座制を遂に成しとげられ、大学行政面での同人の最大の功績と見なされている。また、釧路公立大学と青森公立大学の設

置準備委員会委員となり、両市の近隣市町村からなる事務組合設置方式によるという新公立大学の設立にも尽力された。

以上のように、同人は経済学・経済史の教育・研究を通じて、我が国の高等教育ならびに学術の発展、また大学行政に寄与したところ確たるものがあり、その功績は誠に顕著である。

（経済学研究科・経済学部）

### ○伊藤 浩司 氏



この度は春の叙勲の栄に浴し、光栄の極みと存じております。これも一重に大学における恩師 館脇操先生をはじめ、諸先生、諸先輩、また多くの研究仲間や社会生活活動における各位のお蔭と改め

て感謝の意を表する次第です。さらにまた、昭和33年、北大農学部助手に採用されて以来、35年間、北大において研究生活を送ることが出来たことを幸せと感じている所です。

私の研究分野は主として記載・分類・生態であり、その研究対象は、手つかずの自然であったので、研究を通じて自然環境の理解が大学院環境科学研究科の設立に多少とも役に立ったのかも知れません。しかし、振り返ってみますと手つかずの自然は必ずしも人間に対して融和的・友好的でないわけで、塩湿地群落の研究には、目も口もあけていられない程の蚊の大群の襲撃やその痛み痒みに悩まされたり、雨の日は雨具を身につけながら、うっとうしい思いで林の下、密生する笹の藪こぎをしたりした苦勞の連続が今でも身体の何処かに潜在しています。

多様な植物群落の姿を一つ一つ調査しながらも、目についた植物種個々の分類にも時間を費やし、1940年代迄混乱していた路傍の雑草“ミチヤナギ類”の整理分類、“ヒメキンミズヒキ”の再確認などの成果を得たりしたものでした。

教室の北方林に関する研究成果も次第に集積され、館脇先生の所謂“針方温交林”が浮彫り

にされ、これらの調査研究に用いられた“ベルトトランセクト法”が一つの武器となって私自身、中部山岳や日光あるいは中国長白山に残る亜高山針葉樹林の特性の一端を探ることができました。

昨夏、閉塞性動脈硬化症に襲われ、その上、二次的な負傷がもとで右足膝下以下を切断ということになり、現在、車椅子及び義足生活を余儀なくされています。毎年春の叙勲の日辺りから、天気の良い日には家族一同打揃って春の円山公園を訪れ散策をしたり、桜花の並木を眺めたり、殊にまたカツラの若芽の紅紫色の春の紅葉やほの甘い香りを楽しんだ日々をみずみずしい想いで綴っています。

### 略 歴 等

生年月日 昭和5年5月28日  
 昭和24年3月 釧路市雇員  
 昭和25年10月 } 釧路市主事補  
 昭和27年4月 }  
 昭和33年4月 北海道大学農学部助手  
 昭和39年1月 北海道大学農学部助教授  
 昭和52年4月 北海道大学大学院環境科学研究科教授  
 昭和61年4月 } 北海道大学大学院環境科学研究  
 平成2年3月 } 科長  
 平成5年4月 北海道大学大学院地球環境科学研究科教授  
 平成6年3月 北海道大学停年退職  
 平成6年4月 北海道大学名誉教授  
 平成6年4月 } 清修女子大学(札幌国際大学)  
 平成12年3月 } 教授

### 功 績 等

同人は、昭和5年5月28日に北海道に生まれ、昭和31年3月北海道大学農学部を卒業、昭和33年3月北海道大学大学院農学研究科修士課程を修了し、北海道大学助手、助教授を経て昭和52年4月に北海道大学大学院環境科学研究科教授に昇任、北海道大学評議員を歴任し、昭和61年4月に北海道大学大学院環境科学研究科長に就任され、平成2年3月まで務められました。平成5年4月からは新設の北海道大学大学院地球環境科学研究科教授となり、平成6年3月に北

海道大学を定年にて退職されるまで北海道大学の教育・研究に努め、平成6年4月に北海道大学名誉教授になられ今日に至っています。

同人は、植物群落学、植物生態学、植物分類学、環境科学の分野において幅広く教育・研究活動に従事し、数多くのすぐれた研究成果を発表しています。

同人は、特に植物群落学における群落記載法の確立と基群集-群集分類システムの確立に力を入れ、昭和31年以來の継続研究により、北海道を中心とした塩湿地群落および湿原群落を主対象として、それまで摸索状態であった野外観察記載法を完成し、分類手法として基群集-群集分類システムを確立し、日本における異色ある研究者として学会で注目されてきました。

また、植物分類学における北方系高等植物群を対象とした分類、整理に力を入れ、昭和37年以來の継続研究により、千島、樺太、北海道を含む北方植物群について、種の細分化の方向を脱却し、種グループとしての捉え方に基づく分類整理法を提唱し、定着させました。

さらに、同人は草創期の環境科学における環境保全学、生態系管理学分野の理念の普及定着と整備に力を入れ、昭和52年に日本でも早い時点での設立となる、独立大学院として新設された、北海道大学大学院環境科学研究科教授に就任以來、草創期の手探り状態であった環境科学における環境保全学、生態系管理学分野の教育・研究をリードし、実地に河川、地域、森林域の環境影響評価(アセスメント)調査法などを通して、環境保全学、生態系管理分野の理念を整備し、普及定着させました。

学内においては、昭和61年4月から平成2年3月まで大学院委員会委員、保健委員会委員、施設計画委員会委員及び入学者選抜委員会委員、平成4年2月から平成5年3月までは本学点検評価委員会専門委員会委員を務め、昭和54年6月から昭和56年5月、昭和58年4月から平成5年5月までの約11年の長きにわたって、北海道大学評議員としてその重責を果たされました。大学院環境科学研究科長在任中は、研究教育の内外交流に努め、研究科創設より10年を迎えた事を機に将来構想検討委員会を立ち上げるなど、北海道大学では大学院重点化構想の最初

の発足となる、地球環境科学研究科の設置へ向けて布石をうち、本学の管理・運営に参加尽力されました。

学会活動においては、社団法人環境科学会の創立に尽力し、平成5年12月からは理事としてその運営に参加され、平成4年からは日本植物学会評議員を務めるなど、斯学の発展に寄与しています。

学外活動としては、昭和53年5月から昭和63年5月まで文部省在外研究員候補者選考委員会委員、平成4年4月から北海道文化財保護審査委員会委員及び北海道環境影響評価審議会委員、平成5年4月から浜頓別町史編集委員長、平成5年5月から北海道開拓記念館特別研究推進委員会委員、平成5年8月から大島漁港建設環境調査検討委員会委員の各種役職を歴任し、環境行政・文化事業の分野に大きく貢献しました。

以上のように、同人は、北海道大学農学部を卒業以来、長期にわたり植物群落学、植物生態学、植物分類学、環境科学の分野に関する数々の優れた業績をあげ、教育・学術の発展、後進の啓発と斯学の発展に尽くすとともに、大学の管理運営にも貢献し、また学外にあっては学会並びに社会の公的委員会などの各種要職を務めるなど、その功績は極めて顕著なものと、高く評価されます。

(環境科学院・地球環境科学研究院)

にい つま あつし  
○新妻 篤 氏



このたび、叙勲の榮に浴し、まことに恐縮に存じます。ご高配を賜りました皆さま方に厚く御礼を申し上げます。

私は第2次世界大戦終了後の間もないころにドイツ文学を専攻し、昭和37年から2年間スイスとドイツに留学しました。中立国スイスは戦争で荒廃した周辺諸国の中央にあって、自然は美しく、生活は悠然と落ち着いておりました。ドイツに移ってみ

ると、スイスとは打って変わって、人々は復興の意欲と活気に満ち溢れておりました。巨大な破壊の後のその非常な活気に、私は一種の空しさを感じつつも、その熱気に圧倒される思いでした。日本もそのころドイツと同様に復興の意欲と活気に溢れておりました。

いま、それから半世紀が過ぎ去り、ドイツはスイスに劣らぬ高い生活水準を実現し、日本もドイツに劣らぬ経済大国にはなったのですが、日本人の生活はドイツに比較して、ゆとりが欠け、かならずしも幸福とは言えないと思わざるをえません。そのように思う理由は2つあります。

1つは日本人のいわゆる「働き過ぎ」の問題です。周知のように、日本人の年間総労働時間は約2000時間、ドイツ人のそれは約1600時間とされています。必要な収益・成果を挙げるのに日本人はドイツ人よりも年間400時間も多く働いているのです。日本人の労働効率は甚だしく悪いこととなります。ドイツでは労働形態も自由度が大きいので、個人の事情と勤務時間を都合よく組み合わせて生活することが可能です。

次は生活の土台である住宅の問題です。戦後の日本の住宅は30年くらいで建て替えることが多いようですが、そのときにまた多額の費用がかかり、最期に家屋はほとんど無価値になります。ドイツの住宅は2～300年は使用できるので、家を手放す際にはほぼ建築費用を回収できます。ドイツの住宅も現在で築後2～300年のものは木造ですが、決して安くはなく新築住宅の7～8割くらいの価格がついています。日本人は住宅のために生涯に多額の資産を失っているわけで、もしその資産を保持でき、そのうえ労働時間が適正であるなら、日本人にもゆとりある生活が可能となるでしょう。今年6月からようやく長期優良住宅法が施行されるので、今後は少しは良くなると思われませんが、しかし、その歩みがどうなるのか、安心はできません。

この50年間に日本とドイツの間にこのように大きな差が生じたのです。これは人生の価値の差と言わなければならないでしょう。これについて警告の書物がいくつも出ていても事態は改善されていません。先端分野と社会や生活の関係については科学技術ガヴァナンスのような場



で議論されますが、生活の基本的な身近な問題は日本では軽視されています。たとえば、地下鉄、バス、市街電車、列車のような日常的な交通車両でも、ドイツの車両は乗降口が広く、車内に広い多目的スペースがあるので、自転車、大型のベビーカー、車椅子もそのまま持ち込めます。日本の交通車両の構造とは親切さ・利便性が違います。日本とドイツの交通手段に関する視野・視点の違いなのでしょう。

このような日本の遅れを正すには、迂遠なようですが、学生が専門分野の勉強に入る以前に、全学教育の場で生活文化比較の視点に立つ授業に参加して、日本人自身の生活について問題意識をもつことが必要だと思うのです。半世紀にわたる日本とドイツの生活の質の変化を比較すると、大学は、日本人の生活の基本条件の改善にもっと目を向けてほしいと願う次第です。

### 略 歴 等

生年月日	昭和4年4月24日
昭和31年1月	北海道大学文学部講師
昭和39年10月	北海道大学文学部助教授
昭和51年12月	北海道大学文学部教授
昭和56年4月	北海道大学言語文化部教授
昭和56年4月	北海道大学言語文化部長
昭和60年3月	
昭和56年5月	北海道大学評議員
平成4年12月	
平成3年1月	北海道大学教養部長
平成4年12月	
平成5年3月	北海道大学停年退職
平成5年4月	北海道大学名誉教授

### 功 績 等

同人は、昭和4年4月24日北海道札幌郡藻岩村に生まれ、昭和28年3月北海道大学文学部文学科独文学専攻を卒業、同年4月同大学大学院に進学、昭和30年12月同大学院を中退、昭和31年1月北海道大学文学部講師として採用され、昭和39年10月助教授、昭和51年12月教授に昇任、昭和56年4月同大学言語文化部に配置換えされると同時に同大学言語文化部長、同5月同大学評議員を併任、昭和58年4月より昭和60年3月まで再び言語文化部長および評議員を併任、平成

3年1月より平成4年12月まで同大学教養部長および評議員を併任し、平成5年3月31日限り停年により退職した。

同人は、学生時代から引き続いて、37年間にわたり北海道大学に教師として勤務し、母校に限りない愛着を示し続けた。一貫してドイツ語・ドイツ文学の教育研究に従事し、学生、院生、ドイツ語・ドイツ文学研究者に大きな影響を与えた。

こうした業績の基盤のひとつは数度にわたる欧州ドイツ語圏への研究渡航であった。昭和37年9月からスイス政府給費留学生としてチューリヒ大学シュタイガー教授のもとで、さらに引き続きアレクサンダー・フォン・フンボルト財団奨学生としてミュンヘン大学クーニッシュ教授のもとで研鑽を積んだが、この2年間にわたる研究留学を端緒とする研修渡航、国際会議参加は主なものだけでも7回を数える。本学とドイツ・ミュンヘン大学との交流協定締結は、これらの国際的学術交流のもたらした成果の一つである。平成元年1月こうした学術交流への貢献に対してアレクサンダー・フォン・フンボルト財団から国際学術協力賞「フンボルト・メダル」を授与されている。

同人のドイツ文学分野での研究領域は、19世紀市民社会を背景として成立した詩的リアリズムの系譜につらなるスイスの詩人ゴットフリート・ケラー、同じくスイスの詩人コンラート・フェルディナント・マイヤー、そして19世紀末から20世紀にかけて活躍したドイツの現代詩人ライナー・マリーア・リルケである。昭和30年代の日本の独文学者たちの主たる関心はドイツ本国の文学に向けられており、19世紀であればドイツロマン派に研究のエネルギーが注がれていた。しかし同人の関心はドイツとは異なる国民国家形成過程を辿ったスイスの両詩人に向けられ、そこにどのような異質性と普遍性が見出されるかを問いつめようとした。ケラー研究においては、主要作品の一つである『ゼルトヴィーラの人々』の物語分析的的手法による解明に寄与した。さらに代表作『緑のハインリヒ』の解釈においては、ドイツ教養小説の祖ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』との比較において物語の構造分析に取り組み、ドイツとスイスの精神

構造の差異を明確化した。さらに『緑のハインリヒ』における精神的自由を論じた独文論文では、近代社会における人間疎外の表現という斬新な視覚から問題を捉えなおし、人間疎外の表現形式に関してはケラーが Rilke の先駆をなしているという独創的な見解を示した。この論文はドイツ本国においても反響を呼び、文献シリーズとして研究者必読のメッツラー叢書に採り入れられ、ケラーに関する必読文献として認められている。さらに1850年ごろのケラーの抒情詩が世紀末象徴詩の先駆的表現であることも指摘し、内外の注目を浴びた。

マイヤーに関しては、『マイヤー名詩選』（大学書林、S46）の刊行によって、それまで注目されることの稀であったマイヤーに対する関心を飛躍的に高めたことは特筆に値する。ドイツ語圏におけるマイヤー研究の詳細な検討を踏まえた上で、マイヤーの抒情詩と小説という異なったカテゴリーをそれぞれ正確に分析した。マイヤー抒情詩の技法に関しては存在論的分析手法を駆使し、現実と非現実の間に位置する静謐なる魂の探求の試みとしてその本質を定義した。歴史小説群の解釈にあたっては、正確無比な構造分析を通じて、矛盾と非一貫性を人間存在の核心と捉える視点からマイヤー小説の特質を解明し、我国のマイヤー研究を常にリードし続けた。

さらに同人は早くから Rilke にも関心を寄せ、特に研究の空白地帯であった初期 Rilke の研究においては斯界の先頭に立った。その結実が平成3年刊行の河出書房新社版『Rilke全集』における「第一詩集」および「白衣の公爵夫人」の訳業である。このふたつの優れた翻訳は同全集が平成3年度の日本翻訳出版文化賞を受賞するのに大きく貢献した。

同人の研究業績はドイツ文学の分野にとどまらず、芭蕉と Rilke の空間概念の比較、新渡戸稲造のゲーテ受容などにも及んでおり、いずれもドイツ本国の論文集に収録されている。さらにドイツ語ドイツ文学教授法に関しても、昭和58年のミュンヘン大学シュトッカー教授招聘など多大な功績を残した。

昭和45年4月以降は大学院文学研究科も担当し、同人の強い影響下に巣立った若き研究者も

多い。日本独文学会での活躍はもとより、昭和49年には北海道ドイツ文学会の設立に寄与し、その発展に貢献した。また、北海道大学言語文化部長、教養部長をはじめ学内の幾多の委員会で委員として尽力したが、とりわけ昭和49年からは一般教育特別委員会、教養課程特別委員会、教養課程改革調査委員会委員として教養部改革に貢献し、平成3年から退職までは学部教育課程専門委員会委員長として本学に貢献した。

以上のとおり、同人は多年にわたり教育研究に携わり、独文学者としてのその功績はまことに顕著である。

（国際広報メディア・観光学院、  
メディア・コミュニケーション研究院）

○<sup>ひら</sup>平 <sup>やま</sup>山 <sup>たえ</sup>妙 <sup>こ</sup>子 氏



この度は叙勲の榮譽を賜りまして誠にありがとうございます。身に余る光栄と思っております。これはひとえに関係者の皆様のご支援ご尽力の賜物と深く感謝と御礼を申し上げます。

私は国立京都病院勤務を除くと約37年間北海道大学病院にお世話になりました。学生時代から数えますと、40年以上を緑豊かな北大のキャンパスに通ったことになります。

女性が自立でき、人の役に立てる職業として母と同じ看護師を目指しました。楽しくやりがいをもって充実した仕事人生が送れたことは、何にもまして幸運であったと思っております。家族や友人、先輩・同僚・後輩そして北大病院に関係する全ての皆様に感謝を申し上げます。

振り返ってみますと、入職当時は看護職員の数は少なく、医療環境は今とは比較にならない状況で、看護の社会的認知度も低い時代でした。良い看護を追求し実践していきたい、看護の社会的評価を少しでも上げることができればという気持ちで仕事をしてまいりました。看護方式の検討や看護基準等の整備、看護研究や勉強会

などその時々で必要なことをチームメンバーとともに取組み進めてまいりました。看護業務自体がまだまだ未整備であり、看護職員の数も不足でした。さまざまな課題を抱える中で、子育てしながらの勤務はなかなか厳しいものでしたが、患者さんとの関わりを通じた学びは大きく、医師をはじめとする魅力的なチームメンバーとの交流を通して自分も成長しながら働けることに喜びを感じ、一度も仕事を辞めたいと思うことはありませんでした。

看護管理者として長く勤務いたしました。管理者の役割は良い看護を提供するための職場作りですが、人材育成が鍵といえます。北海道大学の教育理念「フロンティア精神・実学の重視・全人教育・国際性の涵養」の根底に流れる精神は、看護にも通じ、人材育成や組織運営に活かすように努めてまいりました。常に時代の要請に応えた、質の高い看護を実践していくために何をすべきかを考えて取り組んできました。一つ一つの計画を実現するためには理念や意思決定、実現するための組織力など全てが必要です。北大の看護部には歴史と長年培ってきた伝統があり、素晴らしい先輩・同僚・後輩が周りに大勢いてくれたことが私にとって最大の幸運と言えます。

平成19年、診療報酬に新設された7:1看護加算の取得が困難を乗り越え短期間に実現できましたが、これは組織力の端的な表れと自負いたしております。また大学病院の使命でもあり、道内の看護水準を上げるための地域貢献も看護部として可能な限り引き受けて行ってまいりました。様々な場所で活躍されている先輩や後輩に会えるのは幸せなことです。

近年、看護系大学が増え北大も国立大学では最後になりましたが医学部保健学科となり、大学院も整備されてきて今後ますます素晴らしい後輩を輩出されていくものと期待しております。看護職の副院長も多く誕生し、医療の場だけでなく保健・福祉の場においても看護職に期待されることが大きくなってきました。看護職の専門領域がより明確化され、それぞれが責任と権限を持って意欲的に仕事をしており、私が入職当時に願っていたことが少しずつ実現しているとうれしく思っております。

最後になりましたが、北海道大学・北海道大学病院、看護部の発展をご祈念申し上げお礼の言葉といたします。

### 略 歴 等

生年月日 昭和23年1月1日  
 昭和44年5月 北海道大学医学部附属病院看護婦  
 昭和45年3月 婦  
 昭和45年4月 国立京都病院看護婦  
 昭和47年7月 婦  
 昭和47年8月 北海道大学医学部附属病院看護婦  
 昭和51年5月 北海道大学医学部附属病院看護部看護婦  
 昭和60年4月 北海道大学医学部附属病院看護部看護婦長  
 平成7年4月 北海道大学医学部附属病院看護部副看護部長  
 平成13年4月 北海道大学医学部附属病院看護部看護部長  
 平成15年10月 北海道大学医学部・歯学部附属病院看護部長  
 平成16年4月 北海道大学病院看護部長  
 平成17年4月 北海道大学病院院長補佐  
 平成20年3月 北海道大学定年退職  
 平成20年4月 北海道ハイテクノロジー専門学校副校長

### 功 績 等

同人は、昭和23年1月1日佐賀県に生まれ、昭和41年3月に北海道三笠高等学校を卒業後、同年4月北海道大学医学部附属看護学校に入学し、昭和44年3月に同校を卒業、同年4月北海道大学医学部附属病院に採用され、泌尿器科病棟に勤務しました。

昭和45年4月国立京都病院へ転任し、昭和47年8月北海道大学医学部附属病院に戻り、第三内科病棟で勤務しました。ここでは国立京都病院で体験した看護提供方式「プライマリ・ナーシング方式」の体制を整えるため、後輩指導、業務改善等に尽力しました。

昭和52年泌尿器科病棟副看護婦長に昇任し、疾患別の看護基準を作成し、看護実践力の高いチーム作りに努めました。昭和59年4月精神

科・神経科病棟に異動後、翌年4月看護婦長に昇任し、デイケアサービス、レクリエーション療法及びプライマリ・ナーシング方式の充実に尽力し、また、精神科訪問看護のシステム化に取り組みました。

その後、平成2年4月外来へ異動となり、地域への継続看護を視野に入れた看護実践指導や、糖尿病セルフヘルプグループ設立など看護師個人が主体的に看護を実践する環境整備に尽力し、外来看護の質向上に貢献しました。

平成7年4月副看護部長に昇任、また、北海道では初となる日本看護協会認定看護管理者の資格を取得しました。

その後、平成13年4月に看護部長に昇任、患者と看護師が共同で進める「患者参加型看護計画」を全病棟で実施し、看護のインフォームドコンセントを推進する等、患者中心の看護をシステム化するとともに、看護実践能力評価システムの構築、看護師の倫理教育や個人情報保護の遵守を進めました。また、特定専門領域をもつ看護師の育成や、ゼネラルリスクマネジャー、衛生管理者、退院調整看護師、各種コーディネーター等、院内を組織横断的に活躍する看護職を配置し、より専門性の高い看護の提供に尽力しました。さらに、退院を見込んだ看護の推進による入院日数の大幅な短縮、物流管理による支出削減等、業務・経営改善にも積極的に参画し、また、看護基準の改訂等、看護サービスの質の保証にも尽力しました。

このように、看護部長昇任以来、看護の責務と戦略的方針を明確化した看護管理を行い、平成17年4月からは病院長補佐を兼務して、院内行事の実施や、患者からの投書および改善策の公開等、患者サービスの向上に貢献し、去る平成20年3月31日に定年退職を迎えました。

同人は、39年の長きにわたり、看護業務に従事し、患者の直接ケアや看護職員の教育指導を積極的に行いました。

北海道看護協会においては、多くの要職を歴任し、平成20年5月、日本看護協会長表彰を受け、また、看護協会の管理者研修の講師として活躍した他、日本看護協会機関誌『看護』等において、管理者としての立場から様々な提言をしています。

同人の教えを受けた多くの優秀な看護管理者が、北海道大学病院はもちろん、道内各地の病院で活躍しており、これらの功績は誠に顕著であると認められます。

(北海道大学病院)

えん どう けん じ 氏  
○遠藤健二氏



このたび、春の叙勲の栄に浴することになり、身に余る光栄に存じます。

これも偏に永年に亘る諸先輩、同僚の皆様方のご指導、ご協力によるものと深く感謝申し上げます。

振り返って見れば、私は、北海道学芸大学(現北海道教育大学)に友人の紹介で就職したのが、キッカケでした。その頃は、旧制師範学校から新制大学への変革期で、未だ仕事の右も左も分からぬ若い時代のことであり、施設課の諸先輩には、仕事ばかりではなく、色々と手取り足取り教えを受けたものです。

昭和37年に札幌工事事務所に転勤を命ぜられました。当時は、国立高等専門学校の設定に伴い、道内に函館高専、旭川高専の2校が第1期校として創設されました。

着任早々、旭川高専を任せられ、営繕工事しか経験のない私にとっては、新校舎の計画から始まり、設計、積算、現場監理と一連の整備事業を上司の指導を受けながら完成させたことは、苦しみながらも貴重な体験となりました。

新設の旭川医科大学の整備事業を前任の先輩から引継ぎ、折しも第1次のオイルショックにあたり、工事の契約もままならず、講義棟は完成しましたが、後から発注したエネルギーセンターは、建物と基幹整備を含めた計画にもかかわらず、躯体のみで予算が一杯となり、煙突も共同溝も調整(追加予算)に頼らざるを得ない状況となりました。10月には暖房を通さなければ授業になりませんので、止むなく先行工事を実施したところ、本省から課長補佐が視察に来



られて、現地を見て、『煙突も出来ている、共同講も八分どおりできている、これはみんな「タダ」ね。』と言われ、私は必死になって、『冬は待ってくれませんか。』と弁解したことも懐かしく思い出されます。

北見工業大学では、雄大な北の大地と厳しい寒冷地の勤務を経験し、室蘭工業大学では、全国で初めての校舎の耐震改修工事を計画し、実施の運びとなりました。

横浜国立大学では、リクルート事件で、高名な本省事務次官が視察に来学され、その折り、大学の施設の概要説明をしたこともありました。

弘前大学では、バブル期最中の病院再開発事業で、予算不足に、本省との交渉に明け暮れ、一方、津軽弁、のジョッパリの気風に3年間楽しく勉強させていただきました。

北海道大学施設部は、2度の勤めで、最初は、建築課の課長補佐時代の5年間、2度目は、定年前の2年間でした。

昭和50年、札幌工事事務所からの配置換で、この年は会計検査の後始末に明け暮れました。かの勇名〇〇調査官の現場写真による破壊検査で、大恐慌に陥ったものです。しかし、その教訓を経て、その後の工事執行体制が大いに改善されたことは否めない事実です。

2度目の着任は、平成3年、札幌で生まれ育った私の郷里での最後のご奉公！！

11年振りの帰札で、まず驚いたことは、宿舎前の交通量の多くなったこと、一晩中切れることのない騒音に寝不足の毎日で、慣れるまで2か月ほどかかりました。

施設部の同僚は、昔からのなじみも多く、また学部の方々にも課長補佐時代に親交のあった人達が大勢いて、大変心強く思いました。しかし、2年間は、瞬く間に過ぎてしまいました。病院再開発は軌道に乗っているものの、予算が足りなく本省との調整のやりとり、特別整備事業発足による理学部、工学部の再開発、停滞していたキャンパスの長期計画の全学への呼びかけ、工学部のマスタープラン作成と本省との計画協議会の設定などなど、めまぐるしい毎日の連続でした。

振り返ってみると、前期、後期の7年間にわ

たる北大時代は、私の人生にとって、最も華やかな思い出となる時代でした。

四季折々に美しい彩りを見せるキャンパスの中で、多くの先輩、同僚と出会い、そして、すばらしい仕事に恵まれたことを感謝します。

## 略 歴 等

生年月日	昭和7年7月9日
昭和24年7月	北海道学芸大学給仕
昭和25年5月	北海道学芸大学技術見習
昭和27年4月	北海道学芸大学雇
昭和32年8月	北海道学芸大学技術員
昭和34年9月	北海道学芸大学文部技官
昭和37年10月	文部省管理局教育施設部札幌工事事務所文部技官
昭和41年4月	文部省管理局教育施設部札幌工事事務所工営係長
昭和49年1月	文部省管理局教育施設部札幌工事事務所専門職員
昭和50年4月	北海道大学施設部建築課課長補佐
昭和55年4月	北見工業大学施設課長
昭和57年6月	室蘭工業大学施設課長
昭和60年4月	横浜国立大学施設部施設課長
昭和63年4月	弘前大学施設部長
平成3年4月	北海道大学施設部長
平成5年3月	定年退職

## 功 績 等

遠藤健二氏は、昭和7年7月9日北海道に生まれ、昭和23年3月札幌市立工業学校を卒業し、同24年7月に北海道学芸大学給仕として採用され、勤務の傍ら札幌伏見高等学校に通い、同27年3月に同校を卒業しました。

その後、昭和27年4月北海道学芸大学雇、同32年8月同技術員、同34年9月文部技官に任官され、同37年10月に文部省管理局教育施設部札幌工事事務所に転任し、同41年4月同工営係長、同49年1月同専門職員、同50年4月北海道大学施設部建築課課長補佐、同55年4月北見工業大学施設課長に昇任し、同57年6月室蘭工業大学施設課長、同60年4月横浜国立大学施設部施設課長を経て、同63年4月弘前大学施設部長に昇任し、平成3年4月北海道大学施設部長に就任

し、同5年3月定年により退職しました。

北見工業大学施設課長在任中は、太陽エネルギーの有効利用を研究するための附属研究施設の将来計画を教員と共同で取りまとめ、本事業の実現に多大なる貢献をしました。北見工業大学の代名詞ともなるソーラーパネルは、この施設での基礎実験から発展したものであり、現在も同大学を象徴する建物として数々の研究者を輩出しております。

室蘭工業大学施設課長在任中は、弓道場、構造物試験室、課外活動施設及び工学部校舎など数々の施設整備事業に携わり、また、外断熱工法による校舎の大型改修工事を全国の国立大学等に先駆けて実施しました。この事業は、国立学校優秀施設作品として文教施設部長賞を受賞しました。

横浜国立大学施設部施設課長在任中は、学務部庁舎、附属横浜小学校校舎、大学会館及び総合情報処理センターの新築、附属鎌倉小学校の耐震改修工事など多くの施設整備事業を手がけ、施設整備の現場責任者として施設部長を補佐し、関係教員との調整を難なくこなし、事務職員からの信頼も絶大なるものがありました。

弘前大学施設部長在任中は、医学部附属病院新営工事及び理学部校舎新営工事に従事し、教員の困難な要望等に親身になって応え、同大学職員が待ち望んでいた病院の建設を成功に導きました。

平成3年に北海道大学施設部長に就任し、病院再開発の最盛期でありましたが、難しい文部省との折衝や調整を難なくこなし、この結果、平成5年に医学部附属病院新病棟が完成しました。

このほか、理学部や工学部の再開発事業等にも従事し、また、停滞していたキャンパス整備長期計画の実現に向け全学の調整に尽力し、工学部マスタープランの作成及び文部省との計画協議会の設置などに大いに貢献しました。

同大学在職中施設部では、毎年増加する施設整備事業の実施と山積する諸問題の解決に向け、同人が各課長をリードし部内一丸となって取組み、同人の学内での評価は絶大なるものがありました。さらに、施設部長として、事務局長を補佐するとともに、教育研究の発展に施設

整備という側面から寄与し、施設部の責任者として適切な指示、指導あるいは関係教員への施設整備上の助言等を行い、北海道大学の発展に多いに貢献しました。

以上のように同人は、永年にわたって大学の施設整備の進展に精励するとともに、率先して部下の指導育成に尽力し、その功績はまことに顕著であります。

(施設部施設企画課)

○<sup>こう</sup>治<sup>ち</sup>地<sup>まもる</sup>守<sup>も</sup>氏



この度の春の叙勲において、瑞宝単光章を授かりましたことは、大変光栄なことと心から感謝申し上げます。

これもひとえに諸先輩方からご指導、ご協力いただいたお陰と退職後も長年にわたり

応援してくださった工学部総務課人事係の皆様方のお陰と思っています。本当にありがとうございました。

私は、昭和36年11月に北海道大学工学部に採用になり、ボイラ室勤務になりました。ボイラとは何かも知らず、ストーブを少し大きくした物と言われていたのですが、初めてボイラを見た時は想像をはるかに超える大きさに驚いた事を覚えています。私が在職中に取り扱ったボイラ燃料は、石炭(粉炭)に始まり、重油(A, B, C)、灯油、A重油の混合油、LPガス、天然ガスといった種類のものでした。燃料の種類が替わればボイラも替わり、附属される機器類も新機種となり、それをマスターすることが大変だったのが思い出されます。

ことに、平成8年11月から従事した現在のパワーセンターでのボイラ3基と附属機器類の取扱いは大変でした。当時の取付け業者の方々には、大変な迷惑をおかけしたと思います。機器類取付け現場での操作が遠隔操作になり、そのコンピューターをマスターできるまで、日数をかけ取付け業者の方に指導いただきました。

また、その頃から飲料用水、実験用水、雑用

水、市水なども安全に給水するために、薬品による処理、送水に神経を使うようになりました。滅菌用塩素酸ソーダの注入量も送水される水の種類も違いましたので、ことに飲料用水には気配りしました。私にとっては、校舎内を暖房する事と同等に神経を使う業務でした。

薬品類（ボイラ用、水質処理用）の取扱いや薬品貯蔵場所の決定には営繕係と話し合いを繰り返した事、色々な薬品の取扱いに関しては、名前を知っていてもその作用までは知識不足で薬品納入業者の指導を受けたことも思い出されます。

その他に、地下ピット内の各種配管（蒸気、温水、給水、排水）、16台の真空ポンプ、熱交換器取付け場所の計器類の運転状態を1日2回以上見回りしていた事を懐かしく思い出されます。当時、12月から2月までは、毎日のように外気温度が-10℃以下になり、20リットル位入るバケツに熱湯を入れ、凍結した配管等を溶かしたことも懐かしい思い出です。当時のボイラ容量が工学部全体を暖房できず、1時間の間隔で、教室系統、実験室系統に分けて暖房しておりましたが、学生、職員の方々は寒かっただろうと思います。現在は、熱量的には余裕があり、暖房は十分出来ていると思います。工学部玄関を入る教職員、学生が暖かさにホッと顔をみるのが私の喜びでした。

思い出すままに書きましたが、40年あまりの間、大きなアクシデントもなく勤務できた事は、先輩方の正しい指導の賜物と思っています。現在は外注業者主体のパワーセンターですが、札幌の冬は暖房なしでは過ごせません。これからも、安全に教職員や学生を暖めてください。

### 略 歴 等

生年月日	昭和17年3月28日
昭和36年11月	北海道大学工学部用務員
昭和38年4月	北海道大学工学部技能員
昭和45年11月	北海道大学文部技官
昭和47年8月	北海道大学工学部ボイラ技士
昭和52年4月	北海道大学工学部経理課ボイラ技士
昭和63年4月	北海道大学工学部経理課ボイラ技士ボイラ室副主任

平成5年12月	北海道大学工学部経理課ボイラ技士ボイラ室主任
平成8年4月	北海道大学工学部経理課ボイラ技士ボイラー長
平成12年4月	北海道大学大学院工学研究科・工学部経理課ボイラ技士ボイラー長
平成14年3月	北海道大学定年退職

### 功 績 等

同人は、昭和17年3月28日、北海道に生まれ、昭和32年3月札幌中学校を卒業した後、北海道野幌高等学校に進学、同36年3月に同校を卒業して農業に従事した後、同年11月北海道大学工学部用務員に採用され、同38年4月技能員に昇任、同45年11月文部技官に任官、同47年8月北海道大学工学部ボイラ技士に配置換、同52年4月同学部経理課ボイラ技士に配置換、同63年4月工学部ボイラ室副主任、平成5年12月同ボイラ室主任、同8年4月同ボイラー長、同12年4月には大学院重点化による組織名称の変更に伴い、北海道大学工学研究科・工学部経理課に配置換となり、平成14年3月31日限り定年により退職するまでの間、一貫してボイラー関係業務に従事されました。

この間、同人は向上心旺盛で、本学に採用されてから、昭和38年3月2級ボイラー技士免許、同43年2月乙種危険物取扱主任者免状、同年4月1級ボイラー技士免許、同47年10月ボイラー整備士免許をそれぞれ取得し、また、教育研究機関としての大学の機能が十分に発揮できるよう、暖房、給排水設備等の操作点検、整備及びこれらの設備の危害防止等の職務に黙々として専念し、技術の向上及び大学の環境作りに精励されました。

採用時から、工学部暖房室におけるボイラー関係業務に従事してこられました。特に、同学部においては、昭和51年から省エネルギー対策を目的とした全学集中暖房計画の一環として、工学部ボイラー棟から旧教養部ボイラー棟までの暖房蒸気輸送用の配管工事が進められ、工学部と旧教養部を地下ピットで連絡し、工学部ボイラーから旧教養部、図書館北分館及び体育館に蒸気を送り、エネルギー節約を図ったも

のですが、この時、ボイラーの運転及び保守管理の合理化、熱放散予防措置について、同僚ボイラ技士と共に事前に十分な検討を重ねて鋭意努力し、省エネルギー対策に尽力されました。

また、学部施設等の全面改築の途上であり、研究棟、実験棟及び講義棟等の改築、増築に伴う既設建物の解体による配管設備の切替えに際しての適切な助言、建築現場における仮設配管の維持、保守通気を通じて、学部の教育研究等に支障のないよう充分注意を払い、監督補助等の任にあたりました。さらに、平成5年より工学部再開発が始まり、最初に材料・化学系棟の新築工事が着手され、一部旧校舎の解体に際しても現場における指導、助言を積極的かつ的確に行い、また、その後に行われた情報エレクトロニクス系棟の新築工事、工学研究科A棟（研究、管理棟）の改築工事においても、暖房設備の切替え、設置に関して十分な打合わせ及び助言を行うなど、再開発の一環に大いに尽力されました。

近年、本学においてもボイラー業務の外注化が進んでいるが、平成8年4月からはボイラー長として、外注者との業務連携、指導監督、ボイラーの安全運転の徹底を推進、保守管理の合理化、省力化、エネルギー節約のための創意工夫、災害に備えての消火設備の一層の充実を図るなど、その功績は大きく、また、同人は温厚実直な人柄で、その真摯な勤務態度及び適切な指導、助言等は同僚から厚い信頼を得ていたものです。

このほか、在職中においては、ボイラ技士の技能向上を目的として結成されている北海道大学汽缶士会に所属し、昭和61年5月から平成5年5月までは会計業務を担当して会長を補佐するなど、同会の運営に参画して、本学ボイラー業務従事者の技術向上等に貢献されました。

学外にあっては、昭和58年10月社団法人日本ボイラ協会北海道支部から優良ボイラー技士表彰を受け、模範として学内外から多くの信望を集めました。

以上のように同人は、北海道大学において、40年余の永きにわたりボイラー関係業務を通じて大学における教育研究現場の環境作りに専念し、言わば緑の下の力持ちといった職務に従事

されてきたもので、その功績はまことに顕著であります。

(工学研究科・工学部)



## 大韓民国東義大学校と大学間交流協定を締結

4月23日(木)、大韓民国東義大学校との学術交流に関する協定及び学生交流に関する覚書の調印が行われました。京王プラザホテル札幌で開催された調印式には、東義大学校から姜昌錫総長ら2名、本学から佐伯総長、本堂副学長、三上工学研究科長、黒川エネルギー変換マテリアル研究センター長ら8名が出席しました。

東義大学校は1979年に釜山市に設立され、現在9つの学部を有し、学生約23,000人、教職員約1,700人を擁する総合大学です。本学ではエネルギー変換マテリアル研究センターが2002年

2月に、工学研究科が2008年1月に、それぞれ工科大学と部局間交流協定を締結して交流を深めてきました。

これらの交流実績を踏まえ、今後全学的な交流を推進していくために、このたび工学研究科が責任部局となり、エネルギー変換マテリアル研究センターを関係部局として、東義大学校との大学間交流協定が締結されました。この協定締結により、両大学の交流がさらに深まっていくことが期待されます。



協定書を手に握手する佐伯総長と姜総長



調印式後の記念写真

(学術国際部国際企画課)

## 「創成研究機構」を設置

平成21年4月1日から、全学的な大学運営の観点から学内組織の連携機能を充実させることを目的として、「創成研究機構」を設置しました。

当機構は、

1. 本学の研究戦略に基づく新規重点研究テーマの創出，若手人材の育成，基礎レベルにある産学連携研究テーマの支援を行う「研究部」
2. 新規重点研究テーマ創出のための研究連携，新たな研究資金獲得に向けたプロジェクト企画，資金提供団体やその他の協力機関との調整等の支援を行う「研究支援室」
3. これまで機器分析センターで行われていた委託分析業務と創成科学共同研究機構で行われていたオープンファシリティ機能を統合・拡充した「共用機器管理センター」
4. 本学の研究を横断的に支援するため，研究

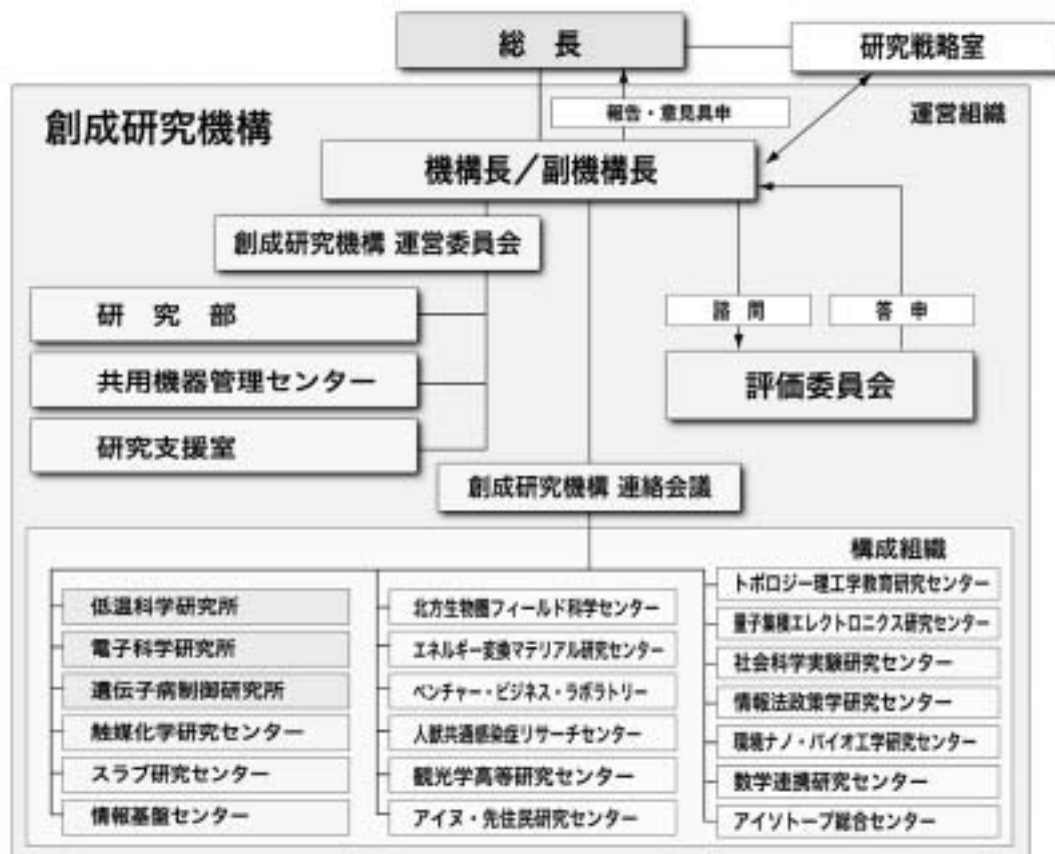
を主たる目的とする本学の研究所，センター等からなる「構成組織」（下の組織図参照）を有しています。

また、

1. 構成組織の研究活動と組織運営についての評価を行う「評価委員会」
2. 研究部，研究支援室，共用機器管理センターについての重要事項を審議する「運営委員会」
3. 構成組織に対して本学の研究戦略情報の提供とボトムアップ型研究の協議を行う「連絡会議」

を設置しております。

創成研究機構では、本学の研究戦略に基づいた研究事業を展開するとともに、全学的研究支援を企図し、機動的に推進してまいります。



(創成研究機構)

## 「人材育成本部」を設置

平成21年4月1日、若手研究者のキャリア形成を促進するために必要な諸施策および女性研究者の研究環境整備に必要な諸施策等を企画・立案し、実施するための総長直轄の運営組織「人材育成本部」が設置されました。

この人材育成本部は、博士後期課程におけるキャリア教育をはじめ博士課程修了後に北海道大学で研究を続けている研究生や任期付きポス

トドクター研究員、また女性教員から女子学生まで研究者を志向する女性の支援活動を行います。

同本部は、「上級人材育成ステーション(S-cubic)」および「女性研究者支援室(FResHU)」の2事業部門で構成され、各事業部門では以下の業務を担当します。

### ○上級人材育成ステーション (S-cubic)

- ・学内人材育成情報の集積と解析
- ・企業人脈の構築
- ・学生、研究者、指導者の就職動向や意識の調査解析
- ・部局人材育成事業との連動
- ・人材育成プログラムの企画・推進

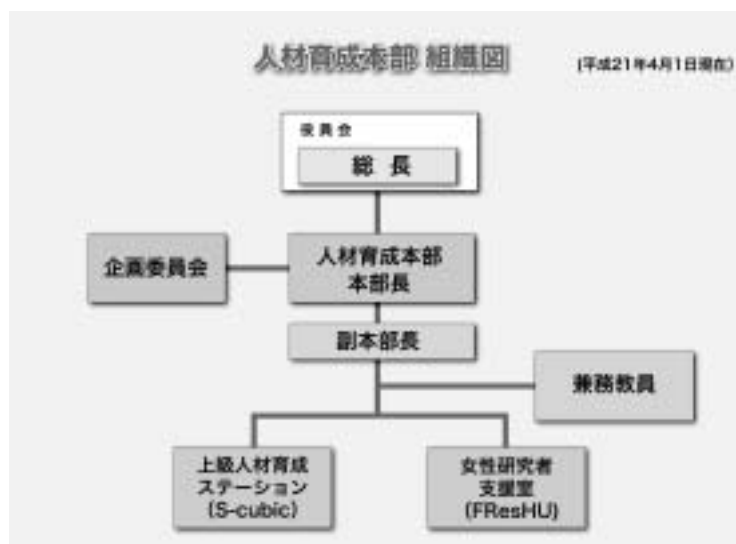
### ○女性研究者支援室 (FResHU)

- ・女性研究者支援プログラムの策定  
(女性研究者ネットワーク、メンタリングシステム、女性研究者育成システム、意識改革に向けた各種取り組み)
- ・支援事業の推進  
(カウンセリング、出産・育児に係る研究補助員や病児保育支援等の人員配置、女子の理系進路選択支援等のイベント開催)

若手研究者、女性研究者の皆様の皆様の一層のご利用をお待ちしております。

人材育成本部の詳細は、下記のURLを参照ください。

<http://mm.general.hokudai.ac.jp/jinzai/>



(人材育成本部)

## 創成研究機構に寄附研究部門を設置

このたび、4月1日付けで、創成研究機構研究部に寄附研究部門として「JAPEX 地球エネルギーフロンティア研究部門」が設置されました。

この寄附研究部門は、石油資源開発株式会社の寄附金により設置されたもので、開設期間は平成21年4月1日から平成26年3月31日までの5年間となっています。

北海道、および周辺海域の地下深部には莫大な量の有機質堆積岩類（コールベッド等）やメタンガスハイドレートが分布しています。また、道南から道東へかけた火山フロントは世界最大級の火山密度であり、地下熱エネルギーの活用にも期待が寄せられています。北海道は地球エネルギー資源に関して高いポテンシャルを持つ

ていることが知られています。北海道大学の優れた立地条件を生かし、本寄附研究部門では地球エネルギーの持続的活用を実現するための新学問領域の創成と研究成果の社会への還元に取り組めます。

本寄附研究部門教員として、兼任教授に鈴木徳行氏（理学研究院教授）、特任助教に斎藤 裕之氏が就任し、また、博士研究員として長谷川精氏が採用されました。本機構のみならず関係部局の研究者と協力し、日本が世界に誇る地球深部探査技術の革新を促し、人類の未来を拓く地球エネルギー研究の推進に貢献することを目的に研究を開始しています。

（創成研究機構）



## インキュベーション施設「北大ビジネス・スプリング」のオープニングセレモニーを開催

4月7日(火)、(独)中小企業基盤整備機構(以下、中小機構)が整備し、北海道、札幌市、北海道大学と連携して運営を行うインキュベーション施設「北大ビジネス・スプリング」の開設を記念し、オープニングセレモニー、施設見学会及び交流会が開催されました。

同施設は、北海道大学をはじめとした大学等が有する技術シーズ、知見を活用した大学発ベンチャーの起業及び中小企業等の新事業展開を支援することにより、新事業・新産業の創出を促進するとともに、地域社会へ貢献することを目的とした中小機構の公的賃貸施設であり、本学北キャンパス内に、平成20年12月に竣工しました。

同施設前の特設ステージにて開催されたオープニングセレモニーでは、主催者である中小機構の前田正博理事長の挨拶ではじまり、来賓を代表して、吉川貴盛経済産業副大臣、高橋はるみ北海道知事、上田文雄札幌市長、佐伯浩本学総長より北海道経済活性化に向けての北大ビジネス・スプリングへの期待なども込めた祝辞が述べられました。

その後、吉川副大臣、高橋北海道知事、上田札幌市長、佐伯本学総長、釣部勲北海道議会議長、畑瀬幸二札幌市議会議長、北海道経済連合会会長である近藤龍夫(財)北海道科学技術総合振興センター理事長、前田中小機構理事長によるテープカットが行われ、関係機関・入居企業等総勢約110名が出席したオープニングセレモニーは盛況の内に終了しました。

オープニングセレモニーに前後して、施設見学会も実施され、吉川副大臣をはじめとして大勢の参加者が、企業紹介パネルや試作品等を閲覧し、研究・開発の実施状況を室内でも見学し、活発な質問・意見交換が行われました。

同日の夕方からは、交流会が開催され、山本雅史北海道経済産業局長の祝辞の後、岡田尚武

本学理事・副学長の祝杯で交流会がスタートしました。

約90名の入居企業・関係機関の方が参加し、入居企業による事業紹介のミニプレゼンも実施され、自社の事業を熱心にアピールする入居企業と参加者とで会場は熱気を帯びた交流会となり、常俊優(財)北海道科学技術総合振興センター副理事長・専務理事の挨拶により、交流会も盛況の内に幕を閉じました。



祝辞を述べる佐伯総長



テープカットの様子(左から、佐伯総長、上田市長、高橋知事、前田理事長、吉川副大臣、釣部議長、畑瀬議長、近藤会長・理事長)

(学術国際部産学連携・研究推進課)

## 北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、法人化後の厳しい財政状況の下、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自律性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っていくこととしています。

期限を付さない、息の長い募金活動を行うこととしていますが、平成18年から平成23年までの5年間で15億円から25億円の募金額を目指しています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

### 【北大フロンティア基金情報】

#### 基金累計額（4月30日現在）

8,172件 1,293,056,939円

教職員の寄附率 21.6% (840件/3,894人)

#### 〈4月のご寄附状況〉

法人等3社、個人184名の方々から45,777,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲載、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

#### 寄附者ご芳名

##### (法人等)

株式会社かね彦、ベリングポイント株式会社、北電総合設計株式会社

##### (個人)

石川 彩花, 石橋 健一, 内田 一郎, 海老田憲人, 太田 幸雄, 大畑 昇, 奥山 克史,  
小内 透, 加我 順一, 角 幸博, 金子 昭三, 小林 好宏, 小山 剛司, 齊藤 雅治,  
杉浦 秀一, 瀬川 宗生, 瀬名波栄潤, 高井 潔司, 高橋 光彦, 高柳 和子, 瀧川 哲夫,  
瀧谷 和彦, 武川利代己, 田中喜久雄, 田辺 陽一, 土家 琢磨, 寺澤 睦, 徳山 雅一,  
所 伸一, 豊田 威信, 中村 忍, 那須 次郎, 二通 英二, 新田 昌弘, 野坂 政司,  
早坂 孝一, 東 廣, 廣瀬 雅哉, 藤田 龍四, 古屋 稔, 細川 敏幸, 牧野 有洋,  
松尾 良一, 松崎 貞夫, 三浦 敏明, 三上 直之, 宮本 孝一, 宮本女恵子, 向井地博之,  
柳田 章, 山岸 俊男, 山岸みどり, 山崎 賢司, 山下 豊, 横山嘉津義, 吉田 広志

#### 銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)

##### (法人等)

株式会社かね彦

##### (個人)

石川 彩花, 小林 好宏, 中村 忍, 柳田 章

## 感謝状の贈呈



大塚ホールディングス株式会社様 (3月27日)



日本製粉株式会社様 (4月15日)



石山喬様 (4月15日)

## ご寄附のお申し込み方法

## ① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。

北大ホームページ

➤ 教職員向け

➤ 学内限定情報・システム

➤ 北大フロンティア基金のご案内(申込書)

<http://www.hokudai.ac.jp/jimuk/gakunai/fund.pdf>

## ② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

## ③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ ————— 基金事務室(事務局1階・学内電話2012/2017)

(基金事務室)

## 札幌キャンパスで「第6回キャンパス・クリーンデー」を実施

4月24日（金）、札幌キャンパスにおいて全学一斉の構内清掃作業「キャンパス・クリーンデー」が実施されました。当日は好天に恵まれ、学生、教職員等昨年とほぼ同数の約2,300人の方の参加をいただき、2時間程で終了しました。

最初に、佐伯総長から「2005年度北海道大学環境目標の中で、キャンパス内の緑地環境の保全を推進することを掲げており、この目的に沿って“環境配慮への啓発活動”を行う必要がある。」との挨拶があり、その後清掃作業が開始されました。

キャンパス内で収集したごみは分別され、ビン・缶・金属等はリサイクル処理へ、また樹木の枝・葉についてはチップ化及び堆肥化し、構内敷地に有効活用をする予定です。

6回目を迎えた「キャンパス・クリーンデー」は春の定例行事として来年も4月下旬に実施を予定しております。

皆様の御協力により構内の環境美化が着実に進み、清潔で緑豊かなキャンパス空間が広がりました。本当にありがとうございました。



参加者に挨拶する佐伯総長



清掃に参加する職員



清掃に参加する教員・学生

(施設部施設保全課)

## 放射線障害防止のための教育訓練及び エックス線障害防止のための教育訓練を実施

4月20日(月)から22日(水)に、放射性同位元素等の取扱者を対象にした「放射線障害防止のための教育訓練」及びエックス線取扱者を対象にした「エックス線障害防止のための教育訓練」を、クラーク会館講堂で開催しました。

この教育訓練は、放射性同位元素等及びエックス線を取扱う際の障害を防止するため、取扱者に必要となる安全な取扱い及び関係法令等についての基礎的な知識等を身につけることを目的として、法令で受講が義務づけられているものです。

昨年度から放射線障害防止のための教育訓練のうち、更新登録者を対象とした回では、特別講演を行っています。今回はアイソトープ総合センター久下裕司教授にアイソトープ及び放射線利用に関する最近の話題について、お話をし

ていただき、大変好評を得ました。

また、新規登録者を対象とした回では、榎原幹典名誉教授、荒木義雄名誉教授を招き、放射線を初めて使用される受講者にもとてもわかりやすく講義をされ、長時間にわたる教育訓練の中、熱心に聞き入る受講者が多く見受けられました。

今年度は、夏に「放射線障害防止のための教育訓練」(新規登録者のみ対象)、秋には「放射線障害防止のための教育訓練」及び「エックス線障害防止のための教育訓練」を実施する予定です。新たに放射性同位元素等またはエックス線を使用するにあたり、取扱者登録しようとする方及び更新登録を希望する方で、今回受講できなかった方は、必ず受講するよう、よろしくお願ひします。



会場の様子



久下教授の特別講演



佐藤委員長の講義

(学術国際部研究協力課)



## 平成21年度「全学教育科目に係るTA研修会」を開催

高等教育機能開発総合センターでは、平成10年度から毎年全学教育を担当する新任TAを対象に、その心構えや役割の理解を深めることを目的として、高等教育開発研究部が中心となり研修会を開催しています。

今年度は、4月6日（月）にセンター大講堂及び講義室等を会場として開催し、約220名が参加しました。

午前中は、総長の挨拶に続いて、大学教育についての基本的な理解等を中心に高等教育開発研究部の安藤厚教授及び文学研究科の瀬名波栄潤准教授による講演等、午後からは、グループ学習として13の分科会に分かれて「講義におけるTAの役割」及び「TAに期待される業務内容等」を中心に討論・発表等が行われ、TAの役割等についての理解を深めました。



総長の挨拶



講演

(学務部教務課)

## 「日本語研修コース」入学式を挙行

本年4月入学の「日本語研修コース」入学式が4月10日（金）午前10時から留学生センターにおいて行われました。今回の「日本語研修コース」には、研修終了後、道内の国立大学に配置される8名を含む、16カ国24名の留学生が入学しました。

入学式では、本堂留学生センター長からの告辞の後、入学者一人一人自己紹介を行い、今後の抱負等が述べられました。

また、入学生は引き続き、留学生センター指導部による外国人留学生のための全学オリエンテーションに参加し、新しい環境に早く適用できるよう、大学での事務手続きや大学生活における相談窓口等について熱心に聞き入っています。

した。



(学術国際部留学交流課)

## 「新入生対象オリエンテーション」を開催

国際交流室及び留学交流課は、高等教育機能開発総合センター大会議室において「新入生対象オリエンテーション」を4月21日(火)、22日(水)及び24日(金)の3日間にわたり開催し、100名以上の新入生が参加しました。この企画は、新入生に北大での留学機会・留学情報の得方・国際交流科目など、北大の留学支援システムについての概略説明を行い、留学に関心を持ってもらい、留学説明会などへ積極的に参加してもらうことを目的として実施しています。

オリエンテーションでは、高井国際交流室員(21日)、蟹江国際交流室役員補佐(22日)、瀬名波国際交流室員(24日)から、留学の意義について、それぞれのバックグラウンドや専門分野の話を通じた激励のメッセージがあり、今回のオリエンテーションを留学について考えるきっかけにしてほしいとの発言がありました。



新入生への激励メッセージ(高井国際交流室員)

た。

次いで、留学交流課スタッフより、留学生センターの紹介、留学に関する情報収集法や語学学習法の説明、留学生と交流できる機会、北大が実施している短期語学研修プログラムの紹介等を行いました。最後に、留学経験者からのメッセージと国際交流サークルSACLAの代表から活動についての簡単な紹介があり、参加者は最後まで熱心に聞き入っていました。終了後に、個別相談を希望する学生もみられ、留学に対する関心の高さがうかがわれました。

国際交流室は、海外留学説明会を定期的に行う他、地域別・プログラム別説明会を充実させるなど、北大生の留学をより身近なものとするため、情報提供に努めています。

留学交流課では、留学相談も行っていますので、留学希望の学生にご紹介いただければ幸いです。



留学経験者の話を熱心に聞く参加者

(学術国際部留学交流課)

## 北海道大学総長奨励金ならびに北海道大学私費外国人留学生特待制度奨学金給付証書授与式を挙行

学業成績が極めて優秀で、本学の教育研究等に深い関心を有する私費外国人留学生に支給される北海道大学総長奨励金及び私費外国人留学生特待制度特待プログラム奨学金の給付証書授与式が、4月24日（金）に行われました。

授与式には、佐伯総長始め関係者が出席し、佐伯総長から留学生一人一人に給付証書が手渡されました。

北海道大学総長奨励金は、留学生の質的向上及び受入の拡充を図ることを目的として、大学院修士課程、博士後期課程（医学研究科、歯学研究科、獣医学研究科にあっては博士課程）、

専門職学位課程に入学を希望する者で、協定校に在籍し、または協定校を卒業した外国人を対象に給付する制度で、平成18年度から開始したものです。今回は2名が受給しました。

北海道大学私費外国人留学生特待制度奨学金は、国際的に貢献する人材の育成を目的とし、大学院博士後期課程（医学研究科、歯学研究科、獣医学研究科にあっては博士課程）に入学する私費外国人留学生を対象に給付する制度で、平成20年度から開始し、今回は11名が受給しました。



佐伯総長から給付証書授与



記念撮影

(学術国際部留学交流課)

## 部局ニュース

# 触媒化学研究センターがアイオワ州立大学理工技術研究所と友好学術交流協定を締結

触媒化学研究センターは、3月10日(火)にアイオワ州立大学理工技術研究所と友好学術交流協定を締結しました。

アイオワ州立大学は、アメリカ合衆国中部のアイオワ州エイズ市にある大学です。1858年創立で、学生数26,000人、教員数1,700人を有し、緑の多い静かな大学では、学生たちが自由闊達に勉学に勤しんでいます。この大学の特徴は、エネルギー省エイズ研究所が隣接していることであり、大学の教員が研究所の研究員を兼務し研究活動を推進しています。また、理工学の学術研究を行う理工技術研究所を持っており、触媒に関連する基礎および応用についても活発に研究を行っています。同研究所では地産植物を原料とした触媒によるバイオ燃料合成やメソポーラス材料によるポリマー合成およびドラッグデリバリーシステムの構築など、世界でもトップレベルの触媒研究を行っています。

本センターは、世界的な触媒・表面科学の研究の拠点であり、数年前より世界的触媒研究のネットワーク形成事業を開始しています。これまでに、中国などのアジア地域、ドイツなどのヨーロッパ地域および米国の触媒拠点と部局間協定を締結し、人的交流、学生派遣、研究会開催、研究室設置などの活動を行ってきましたが、今回その一環として、米国の触媒拠点の一つであるこのアイオワ州立大学理工技術研究所と部局間協定を締結しました。

これまでアイオワ州立大学理工技術研究所とは、教員の個人レベルで交流を続けてきました。昨年6月および10月には先方の教授を本センター特任教授として招へいし、また10月には触媒化学研究センターから教員が訪問して共同研究を実施するなど、密接な関わりをもっていま

す。そして、この共同研究を契機に部局間協定を結ぶ話し合いを始め、協定締結に至りました。

本協定に基づき、今後もこうした密接な関係を持つことにより、持続可能な社会の発展に欠かすことのできない学術基盤である触媒科学の発展に大きく貢献できるものと期待されます。



アイオワ州立大学



協定書

(触媒化学研究センター)

## 数学連携研究センター看板の設置

平成20年4月1日に学内共同教育研究施設として数学連携研究センターが設置されました。本センターは、21世紀COE「特異性から見た非線形構造の数学」の成果、内外からの高い評価を踏まえて、理学研究院と電子科学研究所の共同提案を受けて設置されたものです。

本センターでは、学内の数学研究ならびに数学関連分野の研究に関心を持つ研究者が兼務教員として共同で研究活動を行い、進化し続ける数学に関する研究成果の国内外への発信及び国内外の研究拠点との連携強化を図っていきます。

数学の教育研究活動の深化を支援すると共に、他の研究分野における数学的問題を探索し解決するために、数学を共通の合意言語として形成し、科学の諸領域における「つながる知」の中核としての機能をセンターでは担っていきます。そのために、学内外の様々な研究領域を関連付けるとともに、教育研究の成果を世界に発信し、さらには文理の枠を越えた横断的な思考力を有する人材を育成していきます。これをもって人類が対処すべき課題の解決に資していきたいと考えています。

昨年度はこうした理念のもと、数学連携サロンの開催（全10回）、RCIM Letterの発行、他大学との連携等の活動を行いました。今年度も引き続き精力的に活動していく予定です。学内各部の皆様のご今年度のセンターにおける活動への参加をお待ちしております。

さてこの度、理学部3号館改修工事完了に伴い当センターの看板が設置されたことから4月24日（金）に佐伯総長をお招きし、看板お披露目会をとりおこないました。センター看板の題字は佐伯総長の書によるものです。

平成21年4月1日より数学連携研究センターは創成研究機構の構成組織として位置づけられています。

数学連携研究センターホームページアドレス：  
<http://www.math.sci.hokudai.ac.jp/center/index.html>.ja



センター看板前にて佐伯総長（左）、津田センター長（右）



理学部看板前にて津田センター長（左）、寺尾教授（中央）、佐伯総長（右）



懇談会の様子

（数学連携研究センター）



## 北海道大学学術成果コレクションHUSCAP 講演会を開催

4月28日(火), 附属図書館大会議室において, HUSCAPの広報・普及活動の一環として北海道大学学術成果コレクション HUSCAP 講演会を開催しました。

田村善之法学研究科教授・情報法政策学研究センター長の「他人の著作物を含んだ論文等はどこまでネット公開できるのか? — 現代著作権法の限界と課題 —」と題した講演に, 学内外の教職員, 学生など84名の参加がありました。

講演内容は, 次のとおりです。

1. 日本の著作権制限規定の特徴
2. 一般的な法理による補完に関する裁判例の動向
3. 個別の制限規定による対処
4. 引用法理の動向
5. 結びに代えて — グローバルCOEの紹介 —

著作物性(創作性, アイデアと表現の区別など)および類似性(創作的表現の共通性)から始まり, 最近の裁判例を踏まえた, ユーモアを交えたわかり易い講演に, 参加者は一言も聞きもらすまいと熱心に耳を傾けていました。

最後の質疑応答では, 「村上春樹がエルサレム賞授賞式で行ったスピーチの邦訳がインターネットに出回っているが, これは著作権侵害にあたるかどうか」などの質問があり, 著作権に対する関心の高さが伺われました。

終了後のアンケートでは, 「興味深い内容で大変勉強になった」「今後もこのような講演会を開催して欲しい」など次の企画を望む声が多く寄せられました。

なお, 講演のスライドは以下でご覧になれます。

<http://hdl.handle.net/2115/38344>



講演する田村善之教授



会場の様子

(附属図書館)

## 統合環境科学のための野外トレーニングコースに関する国際ワークショップ開催

環境科学院では、3月4日（水）に、グローバル COE プログラム「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」（環境科学院・農学院環境資源学専攻）主催による統合環境科学のための野外トレーニングコースに関する国際ワークショップが開催されました。これは国内外で実施・計画されている大学院生向けの野外トレーニングコースに関する情報交換を行い、将来に向けてよりよいトレーニングコースの在り方について議論することを目的に行われたものです。海外の野外トレーニングコースに関する報告が2題、国内の報告（計画中を含む）が8題ありました。

海外からの報告では、Rhett Harrison 氏（スミソニアン熱帯林科学センター：CTFS）から、東南アジアの熱帯雨林で開催しているフィールドトレーニングコースについて、Mark Lenz 氏（IFM-GEOMAR）から、ドイツを拠点に世界で実施している海洋科学トレーニングコースについての報告がありました。また本 GCOE プログラムで計画中のサマースクールに関する

報告もありました。

参加者は熱心に聞き入り、最後に総合討論では効果的なトレーニングコースにするための工夫について活発な議論が交わされ、盛会のうちに終了しました。



参加者記念写真

（環境科学院・地球環境科学研究院）

## 経済学部で「こころの健康」をテーマに講演会を開催

経済学部では、去る4月28日(火)午後1時から人文社会科学棟W301教室において、経済学部1年生を対象として「こころの健康」を考える講演会を開催しました。

講演会は、北海道大学保健管理センター講師でカウンセラーである渡邊誠氏により「キャンパス・ライフと心の健康の話」と題して行われ、「ストレスとは何か」、「学生生活の中でストレスを引き起こすもの」、「ストレス対処法」などについて、豊富な事例を交えて説明がありました。当日は180名ほどの1年生の参加者があり、渡邊氏の講演を熱心に聴き入っていました。講演会参加者からは、大学入学時の早い段階での「こころの健康」の啓発に積極的な意義を認めている感想が多数寄せられました。また、1年生のクラス担任をはじめとする教職員の参加者にとっても、今後の学生指導のうえで有意義な

講演会となりました。



講演する保健管理センター講師・渡邊誠氏と熱心に聴く学生

(経済学研究科・経済学部)

## 水産科学院・水産学部で「教員とTAの合同研修会」を開催

函館キャンパスでは、4月20日（月）に函館キャンパス及びその近郊の大学院学生を対象とした水産科学院・水産学部「教員とティーチング・アシスタント（TA）の合同研修会」を高等教育機能開発総合センターとの共催により実施しました。「教員とTAの合同研修会」としては7回目の開催となりました。水産科学院・水産学部では、本研修会を「大学の短時間勤務職員採用時の研修」と位置づけて、原則受講しないとTAを行うことはできないこととしています。また、大学院修了後に「指導的教授をする立場」が社会から求められることから、本研修会は大学院特論の一部となっています。

研修会の前半は、(1)大学教育の基礎（西森敏之教授，高等教育機能開発総合センター），(2)TAについて（全般，実験実習，職業）（水産科学院FDTA研修室）の2つのレクチャーを行いました。大学教育の成り立ち，シラバスの説明，実験実習におけるTAとしての心構え・役割と教員との関係，大学の短時間勤務職員としての留意事項や安全衛生に関する知識を深めました。研修の後半は，TAを行う予定の学科ご

とに分かれて，(3)TAが遭遇しそうな事柄に対してどう対処するかケーススタディとプレゼンテーションのグループ学習を行いました。

当日は，教員24名，TA予定者92名の参加があり，TA相互あるいは教員とTAの意見交換をすることで，TAとしての責任を改めて意識できたようです。



グループ学習の様子

（水産科学院・水産科学研究所・水産学部）



## 函館キャンパスで“チシマザクラ”植樹式及び 記念講演会を実施

4月27日(月)函館キャンパスで“チシマザクラ”植樹式及び記念講演会を実施しました。

昭和60年から現在に至るまで、本キャンパスの桜の状態を観察され、桜の健康管理にご尽力された浅利政俊氏から、チシマザクラを受贈す

ることとなり、管理研究棟前庭でチシマザクラ植樹式を行ったものです。

その後、引き続き、大会議室で浅利政俊氏の記念講演会が実施されました。



チシマザクラを植樹する原研究院長(左)と浅利氏(右)



チシマザクラを囲んだ集合写真



浅利氏の記念講演



板橋副研究院長(左)から記念品を受け取る浅利氏(右)

(水産科学院・水産科学研究所・水産学部)

## 半澤洵関係資料を大学文書館で新たに受贈

4月16日（木）、大学文書館では、半澤洵関係資料を、前川公美夫氏（北海道新聞社出版委員）からご寄贈いただきました。当日は、前川氏から資料ごとに説明を、同伴の前川茂夫人（半澤洵の孫）からは半澤洵にまつわるあたたかいエピソードをうかがいました。

この度、受贈した資料は、①海外留学・出張関係資料、②遠友夜学校関係資料、③講演原稿・草稿など1箱です。

①は、応用菌学研究のため欧米留学した際の「欧米留学日誌」（1911～1914年）、留学中の「受領書翰姓名簿」・書翰控（1912～1914年）、欧米出張した際の「往復書簡綴」（1927年）です。

②は、1921（大正10）年から代表を務めた遠友夜学校の運営に関する資料群です。1929（昭和4）年移転改築工事に関する書類・設計案・青図、開校記念日や「新渡戸稲造校長一周年記念会」等での式辞原稿、『遠友』・『遠友夜学校一覧』などの刊行物が含まれています。

③には、恵迪寮開識社での演説原稿「旅行談」（1925年6月）や、札幌農学校学生時代の回想断片、札幌放送局での放送原稿「納豆」（1938年5月）などが含まれています。

回想断片は、前川公美夫氏・高原二郎氏が翻刻し「農学校学生時代の有島武郎—半澤洵のメモから」（『有島武郎研究』第7号、2004年3月）に発表されています。有島武郎と同級生であった半澤洵の「私は常に有島サンの隣りに席を有して居た御蔭で佐藤昌介先生の農業経済学、農政学、殖民学などの講義のノートには幸いに穴があかず大に助かった」等、学生生活がうかがえます。



有島武郎を回想した手稿

また、放送原稿「納豆」からは、納豆菌の研究と衛生的な納豆製造法の普及に尽力する半澤洵の姿が伝わってきます。調理法に「納豆オムレツ」と書き込んだ納豆包装紙もあります。



放送原稿「納豆」と納豆包装紙

今後、受贈資料については、大学文書館において大切に保管し、沿革資料として幅広く活用いたします。

（大学文書館）

## 池田芳郎旧蔵写真を大学文書館で受贈

4月30日(木)、大学文書館では、池田芳郎旧蔵写真109点を、ご息女の溝口百合子氏からご寄贈いただきました。

池田芳郎(1895～1991)は、1920(大正9)年東京帝国大学理科大学物理学科を卒業後、九州帝国大学講師・助教授となり、1922(大正11)年物理学研究のため2年間にわたり欧米留学、帰国後の1924(大正13)年12月北海道帝国大学助教授として着任、翌年5月には工学部理学第一講座の初代教授となりました。その後、理学部創設準備に携わり1930(昭和5)年4月理学部物理学第二講座担任に就任する一方、工学部理学第一講座も兼務されました。流体力学、応用数学分野の研究で重きをなし、1954(昭和29)年防衛大学校数学物理学主任教授として転出されるまで、工学部・理学部において後進の指導に尽力されました。



工学部第1期生

この度、受贈した資料は工学部・理学部関係写真です。工学部については、機械工学科・電気工学科・土木工学科・鉱山工学科・燃料工学

科・生産冶金工学科の1928(昭和3)年～1945(昭和20)年に卒業した学生写真が揃っています。工学部前庭や教室内で撮影された集合写真、各学生の証明写真です。

理学部については、理学部創立記念写真のほか、物理学科第1期生(1933年卒業)～第14期生(1945年卒業)の集合写真がほぼ揃っています。卒業記念写真には、池田芳郎教授のほか、茅誠司、中谷宇吉郎、堀健夫、梅田魁、古市二郎など往年の物理学科教官の姿も見られます。



物理学科第1期生卒業記念(1933年)

今後、受贈資料については、大学文書館において大切に保管し、沿革資料として活用いたします。

(大学文書館)

## 大学院生による博物館展示リニューアルの取り組み

平成19年度後期より文学研究科の佐々木亨教授に総合博物館の湯浅万紀子准教授が協力して「展示制作プロセス演習」を行っています。その演習の一環として、大学院生達が総合博物館1階の「人間・社会・自然と科学技術」展示室のリニューアルに取り組みました。まず、来館者の行動を追うトラッキング調査や、インタビュー調査、モニター調査を実施し、展示構成要素の特徴や調査対象者の属性を考慮した上で調査結果を分析しました。そして、10年前に当該展示室の制作を統括していただいた工学研究科の小林英嗣教授や、博物館教職員との議論を経て、現状の課題に対応するためのリニューアル案をまとめました。平成20年度後期には、この案に基づいて展示制作会社と共に展示制作の実務に取り組み、この度、第一次リニューアルを終えました。

この取り組みの意義について大学院生が第3回博物科学会（大阪大学）で発表し、展示内容への理解を深めると共に、実際に展示評価を担い、関係者と議論し、展示制作の実務を担った

ことから、課題探求能力やコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力が身に付いたと意味付けられました。

この演習は今後も続き、平成21年度には、工学研究科の但野茂教授にご協力いただいて前年度から実施している工学部の研究室へのヒアリングを継続し、新規展示の制作に取り組みます。また、展示リニューアル後の来館者調査も、佐々木教授と湯浅准教授らによる大学院共通授業科目「博物館学特別講義 II」で実施します。

4月1日（水）、元本学総長で現在は北海道開拓記念館の館長を務められている丹保憲仁先生を佐々木教授が総合博物館にお招きし、10年前に当該展示室の制作にご尽力下さった丹保先生にリニューアルした展示をご覧いただきました。丹保先生が、展示の中でも天塩大橋の模型を特に熱心にご覧になられている最中に、天塩大橋を建造した会社の関係者がたまたま来館され、お二人の間でこの橋の歴史について話が弾みました。



リニューアルした総合博物館1階「人間・社会・自然と科学技術」展示室



左から、丹保憲仁先生、佐々木亨教授、湯浅万紀子准教授、天塩大橋を建造した会社の関係者、馬渡駿介館長

（総合博物館）



## 総合博物館土曜市民セミナー「北海道開拓と北前船」が開催される

総合博物館では4月11日(土)土曜市民セミナー「北海道開拓と北前船」を開催しました。講師は小樽市総合博物館 前館長 土屋周三氏です。

1869年(明治2)年、政府は開拓史を設置し、本格的な開拓事業に着手しますが、本州からの物資輸送は、江戸時代から本州との交易に活躍していた民間の弁財方船と称する木造帆船

(北前船)にゆだねられていました。大阪を基点とするこの船は、様々な開拓物資や生活用品と共に多くの関西文化も運びました。銅鉄製蒸気船による定期航路の開設による物資移送が定着する以前、初期の北海道開拓を北前船の機能と役割から講演されました。

セミナーは超満員で、約120名の市民が参加して熱心に受講していました。



ポスター

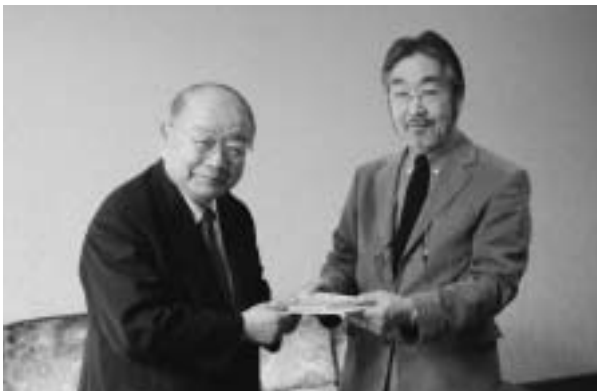


講演する土屋周三氏

(総合博物館)

## 1929年の駒ヶ岳大噴火の記録写真を総合博物館で受贈

4月1日（水）、元本学総長で現在は北海道開拓記念館の館長を務められている丹保憲仁先生が総合博物館を訪問されました。本号40ページで紹介されているとおり、1階の「人間・社会・自然と科学技術」展示室のリニューアルを、10年前に同室の展示制作にご尽力下さった丹保先生にご覧いただきと、文学研究科の佐々木亨教授がお呼びしたものです。



「駒ヶ岳噴火写真」寄贈式での丹保先生と館長

来館された折、丹保先生は、1929年の駒ヶ岳大噴火を工学部の福富忠男教授が撮影された貴重な一連の写真を総合博物館へ寄贈されました。これは、福富教授のご息女の横山明子氏が丹保先生に託されたものです。全部で53枚の写真のほとんどに裏書があり、当時の噴火の様子が詳細に記されています。そのうちの1枚の表裏を写真に示してあります。裏の文章は「大沼公園より昭和4年6月17日正午 爆裂中の駒ヶ岳撮影 (一) 黒煙の物凄さに引きかへ近景の美しき有様を御覧.....」と読めます。

火山研究の第一人者である理学研究院自然科学部門の中川光弘教授にその写真をお見せしたところ、以下のコメントをいただきました。「昭和4年（1929年）の北海道駒ヶ岳の噴火は、桜島1914年噴火とともに20世紀では国内最大規模の噴火である。福富先生の撮影された写真は、

噴火だけでなく噴火後の山頂火口の状況や山麓の火山災害の実態も記録している。これらの写真は状態もよく、さらに日付だけでなく時刻も明記されたコメントも付されており、噴火体験者も少なくなった今、大変貴重な資料である。これらの資料は火山学にとって貴重な資料となるだけでなく、今後の火山防災のためにも役立てることができる」。この貴重な記録は近々、館内に展示する予定です。どうぞご期待ください。



寄贈された「駒ヶ岳噴火写真」他



「駒ヶ岳噴火写真」の一枚の表裏

(総合博物館)

## 無脊椎動物中枢神経系標本を総合博物館で受贈

総合博物館は、この4月に北海道大学大学院先端生命科学研究院の教授として赴任された水波誠教授から、無脊椎動物中枢神経系標本合計48点の寄贈を受けました。水波氏は平成14年に本学電子科学研究所から東北大学へ転出され、この度7年ぶりに北大へ戻られました。

平成18年3月から5月、日本科学未来館は特別企画展「脳！内なる不思議の世界へ」を読売新聞社などの主催で開催しました。この展覧会は、長崎歴史文化博物館、名古屋市科学館、大阪歴史博物館の3館を巡回しましたので、御覧になられた方もいらっしゃるかも知れません。実は、そこに展示された無脊椎動物の脳を含めた中枢神経系全体の標本のすべてを、水波氏は当時の東北大大学院生たちと作成されたのだそうです。

水波氏は、これらの展示標本を大切に保管され、この度北大へ戻られる機会に、東北大学総

合学術博物館ではなく北大総合博物館へ寄贈すべく、札幌まで引っ越し荷物と共に運んでこられました。我々は大いに感謝いたしております。

寄贈された標本は写真にあるように、黒色プラスチック板にピンで留めた中枢神経系全体の標本をアクリルの水槽中に固定液と共に封じ、さらにその水槽をアクリルの箱に収めた二重構造になっています。照明をうまく当てると黒色プラスチックを背景に白い中枢神経系が浮かび上がり、非常に美しいものです。寄贈された48点は、シャコやザリガニ、カブトムシなどの節足動物が多く含まれていますが、その他、ユムシヤゾウアメフラシ、ナメクジなど、中枢神経系を取り出すのが難しく、専門家でさえ、これまで観察したことがないような貴重な標本が含まれています。近々、これらの標本を館内に展示する予定です。「無脊椎動物にも脳がある」というと、一般の方々は大変驚かれるのですが、標本を見れば、無脊椎動物にも小さくても精巧な脳があることを納得してもらえましょう。どうぞご期待ください。



水波誠教授より「無脊椎動物中枢神経系標本」の寄贈を受ける館長



寄贈された標本の一部

(総合博物館)

## 北海道大学病院で事務職員による「ピアノ演奏会」を開催

北海道大学病院では、4月22日（水）夕方、本院アメニティーホールでピアノ演奏会「気楽なピアノ演奏会」を開催しました。

この催しは事務部医事課・医療支援室が患者サービスの一環として主催したもので、毎月第4水曜日に行われており今回が2回目です。演奏者の医事課職員の金澤さんが大学でピアノを専攻したことから、特技を患者サービスに役立てたいとの本人の申し出により手作りの企画として実現したものです。会場の1階アメニティーホールは、患者さんやご家族の方など多くの方が金澤さんのプロ級の演奏にうっとりし、またさわやかなトークを楽しんでいました。

また、この演奏会の様子は、アメニティーホールに設置したライブカメラにより会場に来られない入院患者さんにもベッドサイドテレビの無料放送で放映されました。

本院事務部としては、今後も患者サービス向上のため様々な企画を実施する予定です。



医事課金澤さんによるピアノ演奏

(北海道大学病院)

## 工学部に新食堂（リフレッシュホール）オープン

4月8日(水)工学部に、採光に包まれた新食堂(リフレッシュホール)がオープンしました。

これまでの食堂は、1966年(昭和41年)、大講義棟(B1棟)の地下に約250席の座席を配置して利用されてきましたが、築後42年を経過し、床や壁、テーブル、椅子等の老朽化が著しく、また、学生数の増加、地階への階段の混雑など利便性に支障を来していました。

そのため、大講義棟と共通図書室棟(B2棟)の間の中庭を利用し、地下の窓のない食堂から、採光の取れた地上に1階建てホール(ウッドデッキテラス併設)として新設されました。

新食堂(リフレッシュホール)は、座席数も358席と、従来より約100席も増加し、併設のラ

ウンジ座席数48席と合わせると合計で406席となるため、今までの混雑の緩和が図られ、学生及び教職員にとって快適な空間となっています。また、間接照明を取り入れるなど意匠等は落ち着いた高級感の雰囲気となっています。

食事の提供方法は、単品組合せのカフェテリアとグラムバイキングのビュッフェスタイルの2通りが用意され、利用の選択幅が拡大されました。

利用時間は、リフレッシュホールが11時から20時まで、ラウンジが11時から13時までとなっており、いずれも平日のみの営業です。食事の他、ソフトドリンク、コーヒー等の提供もありますので、是非ご利用ください。



明るく広々とした空間の新食堂  
(リフレッシュホール)



開放的なウッドデッキテラス側から見た食堂

(工学研究科・工学部)



## 植物園の夏期開園と「みどりの日」の無料開園

4月29日（水）から北方生物圏フィールド科学センター植物園の夏期開園が始まりました。雪解けの早かった今年は4月中旬から多くの問い合わせがあり、この日が待ち望まれていました。29日は好天に恵まれ、多くの入園者にお越しいただきました。

また、5月4日のみどりの日は、例年通り無料開園を行いました。初夏を思わせる好天の中、昨年よりも500人ほど多い、約3,400人の市民が訪れました。見ごろを迎えたシラネアオイやエゾヤマザクラの下で写真を撮影する方やスケッチをする方も数多くいましたが、気温が高かったため木陰や博物館、温室が混雑する一幕もありました。

植物園はこれから高山植物やライラックなどが咲き、美しい季節を迎えます。木漏れ日の下で昼食をとったり、芝生に寝転んで時間を忘れてはいかがでしょうか。

整備を行っていた湿生園の木道も通行が可能となり、涼しい空気を味わうことができるようになりました。11月3日までの夏期開園期間中にお越しいただくことをお待ちしております。

なお、植物園内の宮部金吾記念館は、6月ごろより耐震補強・補修工事が行われます。9月からは入館ができなくなりますので、ご注意ください。



スケッチをしたり木陰で休む入園者



にぎわう植物園内

(北方生物圏フィールド科学センター)

## お 知 ら せ

## 平成21年度北海道大学公開講座 「現代社会と倫理—安全・安心なくらしを実現するために—」

米国のサブプライム問題に端を発した不況、建築偽装や食品の安全性をめぐる問題など、私たちの暮らしを脅かしている問題の根底には、現代社会において倫理問題が厳しく問われているという事実があります。本公開講座では、科学技術の発展やグローバリズムの深化のなかで、私たちが安全・安心な生活を実現するために、どのように対応していくべきなのか、現代社会と倫理をキーワードにして多面的に考えます。

- |             |                                                                                                                                                                                                   |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 講 座 名       | 現代社会と倫理—安全安心なくらしを実現するために—                                                                                                                                                                         |
| 実 施 会 場     | 北海道大学情報教育館・3 F スタジオ型多目的中講義室                                                                                                                                                                       |
| 定 員         | 100名程度                                                                                                                                                                                            |
| 道民カレッジ      | 本講座は道民カレッジの連携講座として指定されています。<br>(環境生活コース・16単位)                                                                                                                                                     |
| 受 講 料       | 5,000円(既納の受講料はお返しできません)<br>本学所定の「振込用紙」によりお振り込みください。なお、郵便振替払込受付証明書は、受講申込書の裏面に貼り付けて提出してください。                                                                                                        |
| 特定講義の受講     | 8回シリーズの講義のうち、定員に余裕がある場合には、特定の講義の受講も受け付けますので、希望される方は問い合わせ先までご連絡ください。<br>(特定の講義の受講を希望する場合 1回 1,500円)                                                                                                |
| 申 込 要 領     |                                                                                                                                                                                                   |
| (1) 申込期間    | 平成21年6月9日(火)～平成21年6月24日(水)<br>9:00～17:00(土曜・日曜を除く)<br>(特定の講義の受講を希望する場合には、希望する講義開催日の3日前までにご連絡願います。)                                                                                                |
| (2) 申込手続    | 申込は、事前に下記の「申込・問合せ先」に電話連絡により定員の超過の有無を確認のうえ、直接もしくは郵送で行ってください。<br>◎直接申し込む場合は、受講申込書の裏面に郵便振替払込受付証明書を貼付して申し込んでください。<br>◎郵送で申し込む場合は、受講申込書の裏面に郵便振替払込受付証明書を貼付し、240円切手同封の上(テキスト及び受講者証等の郵送料分)、書留便にて郵送してください。 |
| (3) 申込・問合せ先 | 北海道大学学務部教務課(教務情報システム担当)(TEL 011-706-5429)<br>〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目<br>北海道大学高等教育機能開発総合センター1階6番窓口                                                                                                 |

## お知らせ

## 日程・講義題目等

日	程	講義題目	講師
第1回	7月2日(木)	「リスク社会」を知る	メディア・コミュニケーション研究院 教授 筑 和 正 格
第2回	7月6日(月)	リスクの社会倫理	文学研究科 教授 藏 田 伸 雄
第3回	7月9日(木)	農業に内在する倫理性	農学研究院 教授 佐 野 芳 雄
第4回	7月13日(月)	循環型社会における安全・安心な社会基盤構造物	工学研究科 教授 杉 山 隆 文
第5回	7月16日(木)	遺伝情報と倫理・社会問題	情報科学研究科 教授 渡 邊 日 出 海
第6回	7月23日(木)	企業不正と倫理	経済学研究科 教授 吉 見 宏
第7回	7月27日(月)	創薬開発と生命倫理	薬学研究院 教授 原 島 秀 吉
第8回	7月30日(木)	看護と倫理：患者・家族の生活の質を支えるために	保健科学研究院 教授 佐 藤 洋 子

各回とも、午後6時30分から午後8時30分まで（講義時間約90分、質疑・応答約30分）

(学務部教務課)

## 平成21年度 人間ドックの実施について

文部科学省共済組合北海道大学支部では、文部科学省共済組合本部の指導の下、保健事業の一環として健康管理の推進を目的に人間ドックを次のとおり実施しております。(任意継続組合員を含む。)

なお、平成19年度より受付等については、専門業者に外部委託となり組合員に直接ホームページ等から申込みしていただきますので、よろしくご協力願います。

### 1. 申込期間

平成21年5月11日(月)～平成21年11月30日(月)

### 2. 対象者

満年齢35歳(当該年度の4月1日現在)以上の組合員及び組合員の被扶養者である配偶者です。

### 3. 補助額

組合員 2万円 被扶養配偶者 1万円  
(利用料金が共済組合助成額を下回る場合は、利用料金)  
受診料の個人負担額は、医療機関に支払います。

### 4. 健診機関

「健診機関一覧」HP掲載の健診機関から各自選択します。

### 5. 申込方法

申込方法につきましては、昨年度と異なっておりますので、詳細については文部科学省共済組合ホームページでご確認願います。

なお、ホームページを閲覧できない方は、郵送の申込となりますので所属部局等の担当者へお尋ねください。

文部科学省共済組合ホームページアドレス

<http://www.monkakyosai.or.jp/>

お問い合わせ先(株式会社 ベネフィット・ワン)

健康予約受付センター(カスタマーセンター)

TEL 03-4360-6906

受付時間 10:00～18:00 (日曜・祝日を除く)

### 6. その他

平成20年度から健康保険組合に「特定健康診査」が義務づけられたことに伴い、今回実施する健康診断結果のうち、法定健診項目及び特定健診項目に関する診断内容及び問診結果等の個人情報については保有・利用させていただきます。(目的外利用はいたしません。)

(文部科学省共済組合北海道大学支部)

## 北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設

文部科学省共済組合北海道大学支部では福祉共同事業の一環として、毎年道内各地の宿泊所・保養所と利用契約し、宿泊費の一部負担を実施していますが、平成21年度においても次のとおり実施することにしました。

なお、予算の関係上、割当枚数に達した場合は、契約期間中でも利用券の発行を停止しますので、御了承願います。

1. 契約宿泊施設 宿泊施設一覧表のとおり
2. 契約期間 平成21年6月1日～平成22年2月28日
3. 共済組合負担額 利用者1人1泊につき1,500円補助
4. 利用方法 利用券の発行を受ける場合には、利用券発行申請書を所属部局の担当係へ提出して下さい。
5. 利用資格者 組合員及びその扶養者（小学生以上）とします。ただし、出張の際の利用はできませんので、ご注意願います。

### 平成21年度 宿泊施設一覧

施設名	所在地	電話
ガトーキングダムサッポロ	〒002-8043 札幌市北区東茨戸132	011-773-2211
KKRホテル札幌	〒060-0004 札幌市中央区北4条西5丁目	011-231-6711
札幌ガーデンパレス	〒060-0001 札幌市中央区北1条西6丁目	011-261-5311
定山溪ビューホテル	〒061-2301 札幌市南区定山溪温泉東2丁目	011-598-3339
石狩温泉番屋の宿	〒061-3372 石狩市弁天町34	0133-62-5000
休暇村 支笏湖	〒066-0281 千歳市支笏湖温泉	0123-25-2201
しこつ湖鶴雅リゾートスパ 水の詞	〒066-0281 千歳市支笏湖温泉	0123-25-2211
かんぱの宿小樽	〒047-0192 小樽市朝里川温泉2丁目670	0134-54-8511
ニセコランドホテル	〒048-1511 虻田郡ニセコ町字ニセコ412	0136-58-2121
ルスツリゾートホテル	〒048-1711 虻田郡留寿都村字泉川13	0136-46-3331
国民宿舎雪秩父	〒048-1321 磯谷郡蘭越町字湯里680	0136-58-2328
グリーンピア大沼	〒049-2192 茅部郡森町赤井川229	01374-5-2277
KKRはこだて	〒042-0932 函館市湯川町2-8-14	0138-57-8484
啄木亭	〒042-0932 函館市湯川町1丁目18-15	0138-59-5355



施設名	所在地	電話
飛天	〒042-0932 函館市湯川町1丁目17-22	0138-59-3556
洞爺観光ホテル	〒049-5721 虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉33	0142-75-2111
洞爺パークホテル 天翔	〒049-5721 虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉38	0142-75-4343
湖畔亭	〒049-5721 虻田郡洞爺湖町洞爺湖温泉7-8	0142-75-2211
洞爺サンパレス	〒049-5731 有珠郡壮瞥町字洞爺湖温泉7-1	0142-75-2444
名水亭	〒052-0316 伊達市大滝区北湯沢温泉町300-2	0142-68-6677
第二名水亭	〒052-0316 伊達市大滝区北湯沢温泉町300-7	0142-68-6677
ホロホロ山荘	〒052-0316 伊達市大滝区北湯沢温泉町34	0142-68-6677
登別グランドホテル	〒059-0592 登別市登別温泉町154	0143-84-2425
御やど清水屋	〒059-0551 登別市登別温泉町173	0143-84-2145
石水亭	〒059-0596 登別市登別温泉町203-1	0143-84-2255
アルファリゾート・トマム	〒079-2204 勇払郡占冠村字中トマム	0167-58-1122
層雲閣グランドホテル	〒078-1792 上川郡上川町字層雲峡温泉	01658-5-3111
朝陽亭	〒078-1795 上川郡上川町字層雲峡温泉	01658-5-3241
朝陽リゾートホテル	〒078-1701 上川郡上川町字層雲峡温泉	01658-5-3911
芦別温泉スターライトホテル	〒075-0035 芦別市旭町油谷1	0124-23-1155
国民宿舎あしべつ	〒075-0035 芦別市旭町油谷1	0124-23-1155
大雪山白金観光ホテル	〒071-0235 上川郡美瑛町白金温泉	0166-94-3111
サホロリゾートホテル	〒081-0039 上川郡新得町狩勝高原	0156-64-7111
KKRかわゆ	〒088-3465 川上郡弟子屈町川湯温泉1-2-15	015-483-2643
ホリデーイン ホテル十勝川	〒080-0263 河東郡音更町十勝川温泉南16-2	0155-46-2555
かんぽの宿十勝川	〒080-0262 河東郡音更町十勝川温泉北9-1	0155-46-2141
ニュー阿寒ホテル	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉2-8-8	0154-67-2121
阿寒湖温泉ホテルエメラルド	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉4-6-5	0154-67-2014

## お知らせ

施設名	所在地	電話
あかん遊久の里 鶴雅	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉 4-6-10	0154-67-4000
あかん鶴雅別荘 鄙の座	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉 2-8-1	0154-67-5500
阿寒の森ホテル 花ゆう香	〒085-0467 釧路市阿寒町阿寒湖温泉 1-6-1	0154-67-2500
旅館塩別つるつる温泉	〒091-0163 北見市留辺蘂町滝の湯201	0157-45-2225
サロマ湖鶴雅リゾート	〒093-0216 北見市常呂町栄浦306-1	0152-54-2000
北天の丘 あばしり湖鶴雅リゾート	〒099-2421 網走市呼人159	0152-48-3211
知床第一ホテル	〒099-4351 斜里郡斜里町知床ウトロ香川306	0152-24-2334

(文部科学省共済組合北海道大学支部)

研 修

研 修 名 (主催部局名)	開 催 期 間	開 催 場 所	研 修 目 的
平成21年度北海道地区 国立大学法人等初任職 員研修(一般職) (総務部人事課)	平成21年4月13日～ 平成21年4月15日	百年記念会館 大会議室	北海道地区国立大学法人等の職員としての心構えを自覚させるとともに、初任職員として必要な基礎的知識を付与することを目的とする。



『開講式』挨拶(佐伯総長)



受 講 風 景



『演習・グループワーク』  
(株式会社アムリプラザ)



『特別講話』(嶋貫事務局長)

## 表 敬 訪 問

〈海外〉

月 日	来 訪 者	目 的
21. 4.22	イスラムインドネシア大学 Ruzardi Rustam Ahmad 土木工学研究科長	学術交流に関する意見交換



イスラムインドネシア大学 Ruzardi Rustam Ahmad 土木工学研究科長

(学術国際部国際企画課)

## 同窓会との交流

5月16日(土)、東京同窓会総会が東京神田の学士会館で開催されました。

当日は、120余の同窓生が集い、本学からは鑄山理事、鈴木東京オフィス所長、大西総務部長等が参加しました。

総会に先立ち、本学獣医学部同窓生の旭山動物園小菅正夫名誉園長による「もう一つの旭山動物園物語」と題する講演があり、映画化もされ今や日本を代表する動物園の一つとなった旭山動物園での奮闘記がユーモアを交えながら語られ、大いに会場が盛り上がりました。

総会後の懇親会では、JFEホールディングス株式会社代表取締役社長の数土文夫東京同窓会理事長から、北海道大学の卒業式、入学式に出席された際のエピソードが語られ、鑄山理事からは大学の近況及び北大フロンティア基金への協力依頼がありました。乾杯の発声は今年度から東京同窓会に新たに設けられた世代別の評議員の矢部いつかさん(平成16年水産)により行われ、懇親会は20代から80代までの世代を越えた和やかな交流となりました。

懇親会のフィナーレは、恒例の寮歌「都ぞ弥生」を肩を組んで参加者全員で歌いました。



鑄山理事の挨拶



世代別評議員の  
矢部いつかさんと大先輩



鑄山理事の挨拶を聞く数土会長と  
小菅園長及び東京同窓会

(総務部広報課)

## 諸会議の開催状況

### 役員会 (平成21年4月13日)

- 議 案・平成22年度特別経費事前説明事業(案)について
- 報告事項・法科大学院および会計専門職大学院の認証評価結果について
- ・理工系大学院の再編について
  - ・薬学研究科の廃止について
  - ・連携分野の設置について
  - ・産学官連携拠点の提案について
  - ・平成21年度学部入学者数について
  - ・キャンパス・クリーン・デーの実施について
  - ・会計業務の適正化のための監査の充実・強化について
  - ・経費削減・増収等の取り組み状況について

### 教育研究評議会 (平成21年4月22日)

- 議 題・総長選考会議委員の選出について
- ・経営協議会の学外委員の任命について
  - ・北海道大学共同利用施設「加速器研究室」及び「エリアモニター施設」の指定解除について
- 報告事項・人事委員会報告について
- ・学生の懲戒について
  - ・中期目標期間の業務の実績に関する評価の結果について
  - ・法科大学院および会計専門職大学院の認証評価結果について
  - ・教員の高年齢者雇用安定法に基づく対応について
  - ・薬学研究科の廃止について
  - ・連携分野の設置について
  - ・理工系大学院の再編について
  - ・創成研究機構の設置等について
  - ・学位論文に関する不正防止について
  - ・研究活動上の不正行為について

### 役員会 (平成21年4月27日)

- 議 案・平成21年度老朽化防止対策経費による事業(案)について
- ・スペースの有効活用等について
  - ・平成22年度特別経費(新規プロジェクト)事前説明事業(案)について
- 協議事項・国際化拠点整備事業(グローバル30)について
- 報告事項・平成21年度中に着工予定の施設整備について
- ・平成21年度総長室重点配分経費について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。



## 学 内 規 程

---

### 国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程

(平成21年4月28日海大達第129号)

### 国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程

(平成21年4月28日海大達第131号)

平成21年3月31日限りで、薬学研究科が廃止されたことに伴い、所要の改正を行ったものです。(平成21年4月1日適用)

---

### 北海道大学学生寮規程の一部を改正する規程

(平成21年4月28日海大達第130号)

平成21年4月1日付けで、学校保健法施行規則の一部が改正されたことに伴い、規定の整備を行ったものです。(平成21年4月1日適用)

---

### 北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

(平成21年5月1日海大達第132号)

本年5月1日付けで、理学院に連携分野を設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

---

## 平成21年4月8日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員】 北海道大学病院診療支援部臨床検査技師	坂 井 由美子	採用

## 平成21年4月16日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員】		
北海道大学病院看護部助産師	秋 山 恵	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部助産師	小 山 知 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	赤 塚 多恵子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	阿 部 綾 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	石 川 枝梨花	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	伊 藤 千 紘	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	伊 藤 康 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	井戸端 恵 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	大 澤 真 衣	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	大 寺 彩 加	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	大 藤 結	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	北 内 慧	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	清 永 靖 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	工 藤 さおり	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	熊 倉 寿 希	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	合 田 あ や	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	佐 賀 可奈子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	柴 原 恵	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	庄 林 一 華	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	助 乘 麻 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	鈴 木 智 博	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	高 橋 亜由美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	高 見 梓	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	竹 林 佳那子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	田 原 綾 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	坪 田 麻 未	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	寺 地 貴 弘	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	豊 田 洋 平	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	中 村 加奈美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	間 ルツ子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	半 田 智 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	丸 山 美江子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	南 田 麻 貴	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	本 江 由 実	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	山 重 有 紀	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	矢 元 麻土香	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	若 杉 真奈美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	足 立 詩 織	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	阿 部 紗 弓	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	伊 東 伸 也	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	岡 本 牧 子	北海道大学病院看護部看護助手

人 事

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
北海道大学病院看護部看護師	小野寺 麻 優	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	川 村 真 由	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	木 村 恵 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	栗 秋 昌 代	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	桑 島 拓 大	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	近 尚 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	佐 藤 斐 菜	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	高 橋 さやか	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	土 岐 真美子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	中 村 望 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	成 田 海 緒	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	成 瀬 友 樹	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	藤 田 早 織	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	前 田 絵 里	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	三 上 有 紀	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	阿 部 由里香	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	浅 野 理 更	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	井 川 和 音	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	篠 崎 真 紀	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	野 村 歩 加	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	藤 田 桃 子	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	山 崎 亜 美	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	倉 岡 美 郷	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	今 悠 紀	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	宮 田 沙 季	北海道大学病院看護部看護助手
北海道大学病院看護部看護師	白 井 由 紀	北海道大学病院看護部准看護師

平成21年 4 月 30 日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 (辞職)	蒔 田 直 昌	大学院医学研究科准教授
【技術職員】 (辞職)	加 賀 裕 美 坂 井 里 香	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師

平成21年 5 月 1 日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【経営協議会委員】 (期間：平成23年 4 月 30 日まで)	高 井 修	北海道副知事
【部局長・施設長等】 大学院教育学研究院長 大学院教育学院長 教育学部長 (期間：平成23年 4 月 30 日まで)	所 伸 一	大学院教育学研究院教授
【副研究院長】 大学院教育学研究院副研究院長 (期間：平成23年 4 月 30 日まで)	小 内 透	大学院教育学研究院教授

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教育研究評議会評議員】 (期間：平成22年3月31日まで)	小 内 透	大学院教育学研究院教授
【教授】 大学院歯学研究科教授 大学院獣医学研究科教授 大学院教育学研究院教授	網 塚 憲 生 橋 本 善 春 大 櫃 敬 史	採用 大学院獣医学研究科准教授 大学院教育学研究院准教授
【准教授】 大学院薬学研究院准教授 大学院先端生命科学研究院准教授	市 川 聡 紙 谷 浩 之	大学院薬学研究院助教 大学院薬学研究院准教授
【助教】 大学院医学研究科助教 大学院歯学研究科助教 大学院工学研究科助教	納 谷 昌 直 大 賀 則 孝 村 上 尚 史	採用 採用 採用
【技術職員】 創成研究機構 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院診療支援部理学療法士 北海道大学病院診療支援部言語聴覚士	吉 沢 友 和 吉 田 恵 加 藤 祐 子 木 村 昌 代 吉 田 由実愛 小 島 尚 子 大 澤 恵留美	採用 採用 採用 採用 採用 採用 採用

## 新任部局長等紹介

平成21年5月1日付

教育学院長・教育学研究院長・教育学部長に  
所<sup>ところ</sup> 伸一<sup>しんいち</sup> 教授



平成21年4月30日限り  
で青木紀教育学院長・教  
育学研究院長・教育学部  
長が任期満了となり、そ  
の後任として所伸一教授  
が発令されました。

任期は、平成23年4月30  
日までです。

### 略 歴

- 生 年 月 日 昭和23年9月27日
- 昭和46年 3 月 北海道大学教育学部卒業
- 昭和49年 3 月 北海道大学大学院教育学研究科  
修士課程修了
- 昭和54年12月 北海道大学大学院教育学研究科  
博士課程修了
- 昭和54年12月 教育学博士（北海道大学）
- 昭和55年 4 月 北海道大学教育学部助手
- 平成 2 年 4 月 北海道大学教育学部助教授
- 平成12年 4 月 北海道大学大学院教育学研究科  
助教授
- 平成14年 4 月 北海道大学大学院教育学研究科  
教授
- 平成19年 4 月 北海道大学大学院教育学研究院  
教授
- 平成19年 5 月 北海道大学大学院教育学研究院  
副研究院長
- 平成19年 5 月 } 北海道大学評議員
- 平成21年 4 月 }



## 新任教授紹介

平成21年5月1日付

歯学研究科教授に <sup>あみづか</sup> 網塚 <sup>のりお</sup> 憲生 氏  
(口腔医学専攻口腔健康科学講座)



生年月日  
昭和36年10月2日  
最終学歴  
新潟大学大学院歯学研  
究科博士課程修了  
(平成4年3月)  
歯学博士(新潟大学)  
専門分野  
骨代謝学

教育学研究院教授に <sup>おおびつ</sup> 大櫃 <sup>たかし</sup> 敬史 氏  
(教育学部門教育社会発展論分野)



生年月日  
昭和24年9月14日  
最終学歴  
東京学芸大学大学院教  
育学研究科修士課程修  
了(昭和53年3月)  
教育学修士(東京学芸大  
学)  
専門分野  
体育史学

獣医学研究科教授に <sup>はしもと</sup> 橋本 <sup>よしはる</sup> 善春 氏  
(獣医学専攻獣医学教育改革室)



生年月日  
昭和23年8月28日  
最終学歴  
岩手大学大学院農学研  
究科修士課程修了  
(昭和48年3月)  
獣医学博士(北海道大学)  
専門分野  
獣医解剖・組織・発生  
学, 超微形態学(電子  
顕微鏡)



教授 津田 芳郎 氏 (享年59歳)



教授 津田芳郎氏は、科学研究費による現地調査のため中華人民共和国に出張中のところ、体調を崩され、北京市内の中日友好病院に入院されましたが、平成21年3月22

日午後9時55分（日本時間）、多臓器不全のために同病院にて急逝されました。ここに同氏の生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

津田芳郎氏は宮城県の人で、昭和24年8月31日、同県一迫町（現栗原市）に生まれました。今日の歴史学界において、中国史、とりわけ宋代史研究の最も代表的な研究者の一人でした。

津田氏は、昭和47年3月に東北大学文学部東洋史学科を卒業、昭和49年3月に東北大学大学院文学研究科修士課程を修了、昭和50年3月に東北大学大学院文学研究科博士課程を中退して、同年4月に北海道大学文学部助手として札幌に赴任され、昭和58年3月まで文学部東洋史学講座の助手を務めました。その後、いったん札幌を離れ、名古屋大学教養部で講師（昭和58年4月～）・助教授（昭和61年6月～平成元年3月）を務めた後、平成元年4月に北海道大学文学部助教授として再び札幌に戻られ、以後、教授（平成7年8月～）・大学院文学研究科教授（平成12年4月～）を歴任されました。助手時代を含めると実に28年、同氏は生涯の大半を、北海道大学の教育・学術の発展に尽力されたこととなります。

津田氏は、学内行政においても優れた手腕を発揮されました。北海道大学評議員（平成12年4月～平成14年3月）・北海道大学総長補佐（平成14年5月～平成16年3月）・北海道大学研究戦略室室員（平成16年4月～平成21年3月）を歴任したほか、近年は北京大学との大学間交流協定の締結、北京オフィスの運営などにも参与され、その貢献は本学の国際交流にまで及びました。

津田氏の研究の専門は、宋代法制史および中国近世身分法史であり、精緻な実証と高度な抽象化によって中国史の大きな枠組みを鮮やかに読み解かれました。また同氏は、昭和60年、在外研究滞在先の上海図書館で明版『名公書判清明集』と邂逅した後、この難解な史料の全面的

な解析作業に立ち向かわれました。宋代の裁判判例集である本史料は、津田氏による再発見と研究とによって、国内外において新たな研究の潮流を生み出しました。

津田氏のこうした研究成果の多くは、平成13年以後、次々とまとめられた複数の大著、すなわち『宋-清身分法の研究』（北海道大学図書刊行会、平成13年3月、全348頁）、『宋代中国の法制と社会』（汲古書院、平成14年9月、全480頁）、『訳注『名公書判清明集』戸婚門—南宋代の民事的紛争と判決』（創文社、平成18年2月、全680頁）、『訳注『名公書判清明集』官吏門・賦役門・文事門』（北海道大学出版会、平成20年3月、全267頁）として上梓され、いずれも斯界においてきわめて高い評価を受けています。それらの中で『宋-清身分法の研究』によって、平成14年3月、東北大学から博士（文学）の学位を取得しました。

津田氏はまた、学外にあっても、宋代史研究会世話人（事実上の会長職）や東洋史研究会評議員を務めるなど、斯界の発展にも大きく寄与されています。

津田氏は、学風としては学問的厳しさをもってその特徴とされましたが、人柄としてはそのような厳しさを大きく包み込む温かさを具え、同氏が講座研究室にコーヒーを飲みに来ると、その周りには学生たちの笑い声が絶えませんでした。その人柄は、同氏が主任教授を務めた東洋史学講座の学生・同僚のみならず、学界活動を通じ、多くの人びとを惹きつけ、海外にも「津田ファン」を自称する研究者がいたほどです。4月4日の札幌での葬儀の後、学内に会場を移して行われた「津田芳郎先生 お別れの会」には、津田氏の薫陶を受けた関係者や所縁の人々が国内外から多数参列し、その遺徳を偲んで黙祷が捧げられました。

本来ならばこれまでの教育・研究成果がより大きな実りをもたらす期間となったはずの、退職までの4年間を残し、突然この世を去られたことが、津田氏ご本人にとってどれほど心残りであったかは、心中を察するに余りあるところです。ここに謹んで、生前のご功績とお人柄を偲び、先生のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

(文学研究科・文学部)

名誉教授 <sup>たかぎ</sup>高木 <sup>とおる</sup>徹 氏(享年80歳)



名誉教授 高木徹氏は平成21年4月10日、80歳で逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、昭和3年4月27日、愛知県名古屋市に生まれ、昭和26年3月名古屋大学工学部応用化学科を卒業し、同学科応用化学第2講座油脂化学研究室で大学院特別研究生前後期5年を修了後、同研究室で研究に従事、その後昭和34年2月名古屋大学工学部助手に採用、同38年12月講師、同43年3月助教授に昇任、同50年4月北海道大学水産学部教授に昇任し、水産学部水産化学科魚油化学講座を担当し、平成4年3月31日停年により退職しました。同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

この間、同人は永年にわたって教育と研究に携わり、多数の学生を薫陶すると共に、魚油化学講座の研究体制の確立と整備充実にご尽力されました。研究面においては、油脂化学、脂質化学、有機化学の分野において広範な研究に従事し、幾多の業績を残しており、主なものを大別すると次の2課題があげられます。

1. 同人は昭和34年よりガスクロマトグラフィーの導入による脂肪酸成分分析に携わり、水産生物油について研究されました。昭和36年よりカナダ国立研究所、テキサス州立農工大学で各1年間ガスクロマトグラフィーによる脂質成分の新分析法の開発、その組成、構造、分析、生化学分野への応用の研究を、さらに昭和53年にはカナダ水産海洋省ハリファックス研究所で7ヶ月間新高分解能ガスクロマトグラフィーによる生物脂質分析の研究を行われました。帰国後、これらの得られた新技術を改良し、国内大学研究所での水産油脂分析への普及、食用・非食用油脂製品分析規格の設定に貢献されました。この技術を用いて、ウニなど海洋無脊椎動物、海藻、裸子植物種子の脂質より多種類の特異構造脂肪酸を発見分離し、その分子構造を決定し、組成を明らかにされました。この功績によって、昭和63年3月には日本油化学協会賞・論文賞

を受賞されました。

2. 同人の研究の中で最も注目されるのは1985年以降の脂質光学異性体のクロマトグラフィーによる分離の研究であります。タンパク質、炭水化物、テルペンなど多くの生体構成成分の光学異性体の分離は詳細に研究されているが、脂質については従来ほとんど研究例がありませんでした。同人は光学不活性なグリセロールと脂肪酸の結合によって生成する光学活性な脂質の分離を初めて報告し、分離条件を詳細に検討するとともに、この方法の魚油成分を含むトリアシルグリセロールの立体構造の決定への応用を発表されました。

同人は国内のみならず、外国学会においても講師として多数回にわたり講演し、さらに研究者、技術者の指導にあたり、またカナダ、アメリカ、ソ連などより研究者をたびたび研究室に招聘して国際学術交流を積極的に推進されました。同人は、日本化学会、日本農芸化学会、日本水産学会、有機合成協会、アメリカ油脂化学会、クロマトグラフィー科学会などの学会の会員として、研究発表会参加、学会誌投稿、講演を行うなど活発に研究活動を展開されました。さらに、日本油化学協会には、昭和26年日本油化学協会の創立とともに加入し、以後企画委員、学会賞選考委員、編集委員、国際学会委員などを歴任し、長年にわたり学会活動にご尽力されました。昭和47年度同会功労者として表彰を受け、昭和56年～57年度は同会理事、平成8年度副会長、平成9年～10年度は会長を務め、学会運営に貢献されました。平成19年にはアメリカ油脂化学会よりフェローの称号が授与されました。

以上のように、同人は長年にわたり大学において教育、研究に携わり、多くの人材を育成するとともに、専門である研究分野では脂質とくに海洋脂質より多数の特異構造脂肪酸を発見、構造決定し、またグリセロ脂質の光学異性体の分離を可能にするなど、わが国のみならず世界の学術、技術の発展に貢献されました。

ここに謹んで先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

資料

役 職 員 数

(平成21年5月1日現在)

部局等	職 種	総 長	理 事	監 事	小 計	教授	准教授	講 師	助 教	助 手	小計	専門職	事務職員	技術職員	合計
役員	員 事	1人	7人	2人	10人										10人
副 監 査	理 査 室												2		2
事務局	総務部												4		4
	企画部												55	2	57
	財務部												32	14	46
	学務部												77		77
	国際学部												56		56
施設部												41		41	
附属図書館												14	25	39	
文学研究科	文学部					56	39		15		110		93		93
法学研究科	法学部					35	12		10	6	63		13	2	125
経済学研究科	経済学部					23	20		1	1	45	1	19		82
医学研究科	医学部					44	27	9	58	3	141		9		55
医学系	事務部												2	13	156
歯学研究科	歯学部					19	17	1	53		90		36	2	38
工学研究科	工学部					100	91	4	77	2	274		12	6	108
工学系	事務部												62	4	66
獣医学研究科	獣医学部					18	14	1	11		44		12	3	59
情報科学研究科	情報学部					37	37		24		98				98
水産科学研究科	水産学部					34	38	1	14		87			40	127
函館キャンパス	事務局												24	3	27
地球環境科学研究科	地球環境学部					23	24		8	1	56				56
環境科学研究科	環境学部												10		10
理学研究科	理学部					76	61	8	42	1	188			27	215
理学・生命科学系	事務部												40	2	42
薬学研究科	薬学部					16	6	2	24	1	49			3	52
薬学系	事務部												11		11
農学研究科	農学部					46	39	7	36		128			12	140
農学系	事務部												22	2	24
先端生命科学研究所						14	11		7		32				32
教育学研究科	教育学部					19	10		9	2	40				40
教育学系	事務部												7		7
メディア・コミュニケーション	メディア学部					27	28		2		57				57
メディア・観光学	観光学部												6		6
保健科学研究所						29	14	6	21	1	71				71
公共政策学	公共政策学部					15	5				20				20
北海道大学病院						4	15	58	82		159		105	676	940
低温科学研究所						14	11	2	19		46		9	11	66
電子科学研究科	電子工学部					14	13	1	20		48			10	58
遺伝子病制御研究所						9	10		11		30			7	37
触媒化学研究センター						7	7		5		19			6	25
スラブ研究センター						9	3			2	14				14
情報基盤センター						7	5		2		14				14
アイソトープ総合センター						1			1		2			2	4
留学生センター						3	6	1			10				10
高等教育機能開発総合センター						6	3				9				9
総合博物館						3	2		4		9				9
量子集積エレクトロニクス研究センター						3	3		1		7				7
北方生物圏フィールド科学センター						15	14		15		44		20	78	142
エネルギー変換マテリアル研究センター						3	2		2		7				7
ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー															
脳科学研究教育センター															
人獣共通感染症リサーチセンター						5	3	2	1		11				11
大学図書館									1		1			1	2
観光学高等研究センター						2	2				4				4
外国語教育センター															
アイヌ・先住民研究センター									1		1				1
社会科学実験研究センター									1		1				1
情報法政策学研究センター															
環境ナノ・バイオ工学研究センター															
数学連携研究センター															
サステイナビリティ学教育研究センター						1					1				1
トロジー理工学教育研究センター															
保健管理センター						1		2			3		1	7	11
環境保全センター															
産学連携本部						3					3				3
アドミッションセンター															
人材育成本部															
創成研究機構								2			2		1	5	8
北キャンパス合同事務局													19	1	20
合計		1	7	2	10	741	594	105	578	20	2,038	1	814	1,011	3,874

(総務部人事課)

## 北大グッズショップ・ニュース



北海道大学では、市民の皆様にも本学をより身近に感じていただくために、認定商品やオリジナルグッズを販売し、大変好評をいただいています。新しい認定商品をご紹介します。

### 北大植物園ポスター

「Botanic Garden Hokkaido University」 800円(税込)

いつも北大植物園を応援いただいている「flos society (フロソソサエティ)」の皆さんが製作した北大植物園のポスターです。B2サイズの大きなポスターには精密な筆致で22種類の植物画が描かれており、裏面にはそれぞれの植物の解説も印刷されています。



植物園ポスター

### 販売場所

北大交流プラザエルムの森内「エルムの森ショップ」

TEL: 011-708-7540

営業時間: 9:00~16:30 (4月~11月は無休, 12月~3月は土日祝日閉店)

北大総合博物館内「ミュージアムショップ」

TEL: 011-709-3321

営業時間: 9:30~16:30 (月曜閉店, その他臨時閉店日あり)  
※11月~5月は10:00~16:00

北大グッズショップ2店のホームページ: <http://www.hokudai.ac.jp/goods-shop/index.html>

【問い合わせ先】 総務部広報課

TEL: 011-706-2606

E-mail [kouhou@jimu.hokudai.ac.jp](mailto:kouhou@jimu.hokudai.ac.jp)

### 〈訂正〉

北大時報No.661(平成21年4月)掲載の平成21年度日本学術振興会特別研究員選考結果一覧に下記のとおり誤りがありました。

平成20年度分 合計 補欠 (誤) 24 (正) 0

なお、ホームページでは訂正済みです。

### 〈編集メモ〉

▼5月中旬頃からポプラ並木横の花木園のクロユリが開花し始めました。北海道大学美術部「黒百合会」のメンバーらが中心となり、北大元気プロジェクト「黒百合群生地復元事業」として、かつて構内に群生していたクロユリの群生地を復元したもので、平成18年春から毎年たくさんの花を咲かせています。今年もこのクロユリを目当てに多くの方がポプ

ラ並木へいらっしゃっていました。

▼また、6月2日(火)から16日(火)までの15日間、交流プラザ「エルムの森」で、美術部「黒百合会」の展覧会が開かれます。毎年この時期にエルムの森で開催している展覧会は、学生達による絵画や陶器などの作品を展示し、好評をいただいています。展覧会開催期間中には大学祭も開かれます。1人でも多くの方に足を運んでいただきたいと思います。





2007. 5. 5 月形町

---

北の息吹⑤ エゾノリュウキンカ (*Caltha fistulosa*)

山菜のヤチブキとして知られ、北海道の湿地帯では普通に見られる植物。しかし、食用として採取されるため里山の群落は年々縮小しており、もうそろそろ山菜としての利用は止めるべきであろう。野幌森林公園にあった大きな群落も、近年は貧弱になってしまった。花が咲き始めの頃は、大きな若葉と形の良い肉厚の花のバランスが絶妙で、小沢を埋め尽くす黄色のカーペットに出会うとしばし見とれてしまう。

理事・副学長 岡田 尚武

北大時報 ⑤ May 2009 No.662 平成 21 年 5 月発行

北海道大学総務部広報課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-4870 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/